

---

# 明久と水泳と幼なじみ

バカと不幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明久と水泳と幼なじみ

### 【Nコード】

N8529X

### 【作者名】

バカと不幸

### 【あらすじ】

この作品の始まりはまさかの明久帰国？

今僕はアメリカのサンフランシスコ空港に僕達はいるよ  
何でいるかってこれから帰るんだよ日本に

PV67000達成！ユニーク数10000人突破！ありがとうござ  
います！

本当にありがとー！！！！

現在清涼祭編です！

明久帰国！！！（前書き）

今回オリジナルの小説を書きます

明久帰国！！！！

今日もいつもとは違う朝の感じだ現在僕は飛行機の中にいる。

現在時刻は日本時間PM13時27分僕はアメリカにいたから凄い眠いよでも起きなきゃそろそろ着くし。

横には僕の幼なじみがいるこの子の名前は『工藤愛子』緑色の短い髪で性格は明るく元気な性格の女の子。

何故飛行機に乗っているか？それは僕は水泳のジュニア世界大会と何か世界的に有名な人が教えてくれるらしいから行ったんだ。一応僕freeは凄く早いんだからね！

確か愛子は平泳ぎが早かったよタイムは………忘れちゃたまあいつか……おっと！起こしてしまったようだ。

愛子「ん、アッキー起きたの後どれくらいでつくかな？」

明久「後8時間ぐらいかな」

愛子「懐かしいなあ日本一年ぶりだもんね」

そっか文月学園も中部じゃなくて高等部だもんなそーだクラスも成績でかわるシステム何だよね。

愛子「元気にしてるかな優子とか翔子とか唯とか」

明久「元気にしてるよ皆ね」

愛子「ねーねアッキーテスト大丈夫だよね」

明久「当たり前じゃん」

そう帰ったら僕達は《文月学園》のクラス分け試験が待っているのだ。

最悪だよ明日だよ、もう帰ったらゲームやりたかったのに……

愛子「明日ゆっくり寝たかったのになあ！さてとだったら勉強しよ、勿論《保健体育》だよ」

明久「が、頑張つて愛ちゃん僕は古典とか勉強してるよ」

愛子「了解したよアッキー」

愛ちゃんは《保健体育》が好きなんだよね。楽しみだな皆に会えるの今頃なにしてんだろ。

-----

その今頃・東京ラウンドワン内のゲームセンター

？「そーえば明久今日の夜帰ってくるらしいぞ」

そう言ったのは赤色の髪で長身の男の子この子の名前は坂本雄二等部の時のあだ名が《悪鬼羅刹》というあだ名だよ。

あの時は喧嘩ばかりやってたっていう噂もあったしね。

雄二「しかしあの水泳バカ帰ってきててもFクラス確定だな」

？「…同感だバカの代名詞だからな」

この子の名前は土屋康太何かつかみ所の無い雰囲気を出した男の子だが実際はプロレベルのカメラの腕速さから『現代に蘇った忍者』といわれている。

康太「…どう思う秀吉」

秀吉「そうじゃな工藤といったから少しは勉強できるかもしれんぞ」

見た目はどこから見ても美少女しかし実際は男の子かつじーさん言葉を使ってしゃべる特技ともいえるのがどんな声量も自由自在に出せる喉簡単にいうとモノマネが得意。

雄二「あいつの事だバカは死ななきゃ変わらないっていうんだから変わらんだろ」

康太「…なんとも言えない」

秀吉「まあ明日聞けばよいではないか」

康太「…そうだな」

そんな話をしていると横から

？「あのぉー明久君の友達ですか？」

雄二「明久って吉井明久の事か？」

？「そーです！明日帰ってくるって本当ですか」

秀吉「そうじゃがというかオヌシ誰じゃ？」

秀吉がその女の子に聞くと

？「ごめんなさい私は《吉井明菜》と言います」

雄二「ん、吉井？」

優香「はい明久の妹です！」

優香は携帯を開くとビックリっていう顔をして。

明菜「すいません急用ができました！引き止めてすみません」

深いお辞儀をすると走っていつてしまった。

雄二「…一体何だったんだアイツは」

康太「…台風みたいだった」

秀吉「…そうじゃな明久にまさか妹がおったとは知らなかった」

秀吉がそついうと、康太は携帯を出して。

康太「…いた俺のメモってた日記に書いているだ」



雄二「何でそんなのメモってんだ？」

秀吉「その前に何故オヌシはそんな情報を知ってるのじゃ」

そんな秀吉の言葉はむなしく誰にも届かなかった。

康太「…昔日記にハマっていた、今も付けている」

雄二「そうだったのか、知らなかったは」

康太「…まあな、とりあえず今は遊ぼう」

康太は携帯の電気を消した。

秀吉「そうじゃな、遊ぶかのお！」

雄二「だなさあ次はドラムの達人で勝負だ！」

明久帰国まで7時間42分……長い

明久帰国！！！（後書き）

作者「どーもバカと不幸です新作ですよ新作」

明久「作者がここにでるなんて珍しいな」

作者「珍しい？よくきずいてくれた！他にも来てくれたの」

明久「きてないよ」

作者「ぐはぁ！」

登校日（前書き）

スイマセンがテストの所飛ばします

## 登校日

少し昔の話をしよう

2日前のテストの日は何もなく普通な日が続いた何故か知らないが雄二、秀吉、ムッツリー二とか昔遊んでいたメンバーにも会わず登校日が来た。

だが此処で最大のミスを起こした

僕は今夢の中にいる何故分かるかよく分からないけどそんな感じがするからだ。

？「く …… ないと …… する…！！」

誰？ううねむい…………… よまだ起こさないでよ…………… うわ！！僕は突然誰かに毛布を奪われた。

愛子「遅刻しちゃうよアッキー！！」

僕の目の前では愛ちゃん《こと工藤愛子》（現在阿修羅状態）が毛布（僕の）を脇に抱えて仁王立ちしていた。

あ、阿修羅が見えるのは何故たる怖いよあ、愛ちゃん

明久「ご、ごめんごめん朝ご飯は…………… いいや！行こう！」

愛子「その格好で行くの？」

どんな格好つてももちろん制h……

明久「そっか今起きたんだもん……やばあ……い……！」

危ないパジャマで行くところだったよって遅刻するよ……！

愛子「今頃気づいたの早く準備して……はいこれ制服」

明久「先に外出ててほら早く！」

流石に幼なじみにパンツ一丁の僕は見せられないよ

当たり前でしょ！僕はまだ変態じゃないもん……まだっていうところからなるみたいじゃないか……！！！！

まあ早く着替えるか

—————

明久「よし行くか！」

そういえば今何時なんだろ

明久「愛ちゃん今なん時？」

愛子「8時16分だよ、遅刻ギリギリ前に着くか着かないかぐらいじゃない」

ヤバいなあ僕は遅刻でも愛ちゃんを遅刻にするわけにはいかないしこーなったら走るか！

明久「僕の手に掴まって…走るよ！」

愛子「えっ！ん」

全速力で僕達は文月学園に向かっていった途中の道で軽く走っている雄二、秀吉、康太に会って合計5人で走っていった。

走ったおかげでなんとか遅刻せず学園に着くことができた。

そういえば何でテストの時雄二達いなかったんだろ？

雄二「それはな、俺達中等部からいるものは退学とかにならない限り高等部に自動入学でkindだよ後テストはもう受けたからな」

明久「へえそうなんだって！何で僕の考えに答えてんの？」

えっ雄二ってテレパシーの能力なんて僕がない間に身につけたの！

康太「…顔に書いてある」

どうゆうこと？顔？

秀吉「そういわれて、顔を触る明久はバカじゃな」

明久「何と失礼な僕はもうバカじゃないんだから」

愛子「まあ一年もアメリカにいれば英語は少しは出来るようになるよね」

そこは慰めるところだよ愛ちゃん！少しって酷くない。

雄二「まあいい行くか、うーす西村先生」

西村「挨拶は《うーす》ではなく《おはようございます》だろ」

西村「遅刻しなかっただけまあいいが」

明久「Hello Mr・NISIMURA」

西村「明久よここは日本だ」

愛子「それよりテストの結果を」

西村「すまない工藤この馬鹿達の世話をするのが日課になってしまつてな」

西村は脇に抱えていた箱の中から《工藤愛子》《吉井明久》《坂本雄二》《木下秀吉》《土屋康太》と書いてある封筒を出して皆に渡した。

皆に封筒を渡すと西村先生は明久に向かってしゃべれかけてきた。

西村「吉井よお前はアメリカに行つて学力もかなり変わったな特に《英語》が」

雄二「ふんっ上等だあ！」

秀吉「行くかのおワシらの教室に」

康太「…行くぞ雄二、秀吉」

明久「よかったギリギリだったのかな？」

愛子「まあ当然だね！行こアッキー」

明久「良かったあゝさてと、行きますか」

今回のテスト結果は、雄二秀吉康太はFクラス明久はギリギリAクラス愛子は当然Aクラス

そんな中一人皆より先に移動して別の場所に来ていた。

その男は赤い髪をした長身の男そう、《坂本雄二》だ

そして雄二は小声でこう呟いた

雄二「行くぞAクラス、設備は頂く」グッ

Aクラスの前で一人拳を出した後ポケットに手をつ込みながらFクラスに歩いて行った。



## 登校日（後書き）

気に入ってくれたなら評価をしていただけると光栄です

感想も待つてまゝす

オリジナルキャラクター募集中です

せひぜひどうぞ！

よろしくお願いします！

この後は試験召還戦争編です！

## Fクラスの設備と優等生の仲間達

雄二が教室に入ろうとすると後ろから突然声をかけられた。

？「雄二何でいるの……此処本当に教室？」

雄二「ん、確かにそうだがおまえとはかけ離れた場所だろ《お嬢様》」

《お嬢様》と呼ばれた女の子はそう言われるのが嫌なのか顔を真っ赤にして

？「雄二そのあだ名で私を呼ぶな！私は《獅童梨香》だ忘れるなよ雄二ー！」

獅童梨香この女は俺の幼なじみで実際の学力はAクラス並しかしテスト当日風邪で欠席なためFクラスに

梨香「行くよ雄二」

雄二「了解了解」

そして俺と梨香が入ると突然カッター、ハサミなどが飛んできた。

雄二「ど、どうした《FFF団》」

モブ1「女と一緒に来るなどおぞましい殺す！」

モブ2「異性と登校とは殺す！」

？「暇つぶしとノリとテンションで殺す」

クソがFFF団の存在自体忘れていた……何か変なの混じってなかったか

？「よお雄二相変わらず朝から元気だな」

雄二「帰り何か奢るから助ける！」

雄二がそう言うとその男はニヤリと笑い

？「その話のつた！」

モブ1「何だと！お前グハア」

モブ1が喋り途中の時男はラリーアットを繰り返した。

？「この《西園寺竜也》に勝てると思ってんのかケンカで」

モブ2「ハッハハ完敗だよ雄二」

モブ2は突然雄二の顔を見て笑い出した多分笑ってるんだろ。

何故分らないのか顔にマスクをしているからだ

？「ハッハハFFF団にはノリで入ったがただの非リア充の嫉妬じゃないかまあ俺には関係ない無いが」

モブ1「どうゆう意味まさか！お前！リア充かあ！」

？「期待を裏切って悪いが俺は彼女はいない」

モブ１「なら私達と同種族ではないか」

？「別にいいじゃねーか女と話そうが俺達には関係ないだろ」

そんな若干ケンカになりそうな所で扉が開いた。

福原「えー皆さん座ってください朝のＨＲを始めますよ」

ふと時計に目を落とすと時刻は８時４０分だ

雄二（そうか高等部はＨＲの時間が早まるんだよな」

福原「えーおはようございます二年Ｆ組担任の……………福原慎ですよろしく願います」

このクラスはチョークさえ用意されないのか何だこのＡクラスとの差は！

福原「まずは設備の確認をします」

卓袱台

座布団

福原「えー不備があれば申し出てください」

教室は何も言わなかったいや言えなかった正確に言うと声が出なか

った。

福原「無いですね」

福原「では自己紹介でも始めましょうか廊下側の人からお願いします」

先生がそう言うのと端っこの席に座る男いや

《男の娘》が席を立った。

秀吉「木下秀吉じゃ演劇部に所属しておる今年一年よろしくな」

秀吉の説明かどちらにしる代表の俺は最後だな。

康太「…どーも土屋康太だ趣味は盗…何でも無いよろしく」

本音が出るところだったなムツツリー二盗撮とか言おうとしたんだな。

竜也「えー俺の名前は西園寺竜也趣味として八年間合気道をやっていたよろしく」

その後何人が続いた後眠たくなってきた俺は若干ウトウトしていた。

その時知っている声がした

梨香「私の名前は獅童梨香だ男っぽい性格は昔からなので気にするな一年よろしく」

だるコイツとは関わりたくないな昔から面倒な奴出し

梨香「忘れていたがその赤髪男とは幼なじみだ手を出したらぶつ殺す」

次の番のヤツはさっきの偽物FFF団の奴か一体誰なんだ？

？「いやいや俺の名前は……どーでもいいか趣味は泳ぐ事そうだ！俺の事は《レックス》って読んでくれよろしく」

福原「……えー最後は代表の坂本雄二く「遅れましたー！！」来ましたか《松村空》君登校初日から遅刻ですか」

空「ハアハア……えー俺の名前は松村空《松村財閥》の副代表を務めているFクラスに入るのは面白そうだからよろしく！」

まさかの金持ちか人は見かけによらないって誰かが言ってたからな

雄二「最後でしたね先生、Fクラス代表の坂本雄二だ代表でも坂本でも好きに呼んでくれ」

皆「……………」

真剣に聞いてくれてるなら結構ださて続きを話しますか

雄二「さて皆さんに質問だ《折れかけた卓袱台》《ひび割れていたり割れている窓ガラス》《綿が抜けたり破れている座布団》がこの教室の説明だな、ではAクラスの説明だ《冷暖房完備》《リクライニングシート》《個人用冷蔵庫兼エアコン》いくら学費が安いからっておかしくないか？」

雄二の意見に賛成のようで皆顔を上下していた。

雄二「では再度聞く、「不満は無いか？」」

皆「大ありだああああ！！！」

Fクラスの魂の叫び声が響いたいやゝ自分で言うのは何だが今俺すげー悪い顔してるな

梨香「悪い顔してんな雄二」

雄二「俺の意見を言うコレよりFクラスは《試験召還戦争》をAクラスに申し込む」

この発言の後Fクラスの空気が凍りついた、まあ笑ってる者やニヤリと薄く笑っている者もいたが。

福原「若いっていいですね」

何言ってるんじやが、ハア生徒も生徒じやが先生も先生じやな

そう考えた秀吉の考えはもう誰にも届かなかった。

**Fクラスの設備と優等生の仲間達（後書き）**

オリジナルキャラクター募集中です

評価 登録 感想お待ちしております！



## 人物紹介1（前書き）

緊急ですが人物紹介始めます

## 人物紹介1

吉井明久 ヨシイアキヒサ

所属クラス Aクラス

size 162

### 特徴

原作とは違い勉強もまあまあできる。しかしアメリカに一年間いたため英語が先生も抜く事もある。

召還獣

明久を小さくした感じ

### 装備

武器 暗殺刀（何かハンパな形をしている）

防具 学校の制服だが右肩の部分にドクロのマークがついている

腕輪

？

工藤愛子 クドウアイコ

所属クラス Aクラス

h i g h 1 5 2

3 s i z e    B 7 8    w 5 6    H 7 9

### 特徴

原作と同じで明るい性格だが下ネタ発言や爆弾発言は少なくなっている。

### 召還獣

愛子を小さくした感じ

### 装備

武器    首切り包丁（形がおかしい）

防具    学校の制服だが左肩に羽根のマークがついている

### 腕輪

#### 《雷鳴》

自分の武器に電気をまとわせる事ができる

### Fクラス

坂本雄二    サカモトユウジ

所属クラス    Fクラス

h i g h 1 7 8

## 特徴

実際はAクラス並みの学力を持つも《点数こそ全て》という事が嫌いでチームワークを大事にしている。

頭の切れは原作よりも進化している。

## 召還獣

## 装備

武器 ナツクル

防具 改造学ラン

## 腕輪

《鴛鴦》

エンオウ

自分自身の武器に炎をまとわせる。それを投げることや火炎放射する事もできる。

実際一番使い勝手がよく未だ新技がでるかもしれない。

木下秀吉 キノシタヒデヨシ

所属クラス Fクラス

high156

#### 特徴

見た目は美少女中身はおじさんというギャップを持った少年。

頭はそれほどよくないが演劇部に所属しているだけ合って声真似が上手い。

#### 召還獣

#### 装備

武器 薙刀

防具 袴

腕輪

？

土屋康太 ツチヤコウタ

所属クラス Fクラス

h i g h 1 5 9

#### 特徴

ほぼ全ての言葉に「…」つく寡黙な性格。

保険体育の成績ではAクラスの成績優秀者もののぐ学力しかし他の教科は壊滅的で昔の明久よりも低い。

召還獣

装備

武器 小太刀（忍者刀）

防具 忍者の服

腕輪

《加速》

獅童梨香 シドウリカ

所属クラス Fクラス

h i g h 1 6 4

3 s i z e B 8 6 W 5 8 H 8 3

特徴

黒いロングヘアをポニーテールしている目は青色

見た目は美少女なのだが口調が男っぽく性格も男っぽい。成績は英語がAクラスレベル

召還獣

装備

武器 鎖鎌

防具 甲冑

腕輪

？

西園寺竜也 サイエンジリユウヤ

所属クラス Fクラス

h i g h 1 8 2

特徴

灰色の髪で筋肉質の体で長身

いつもノリとテンションで行動しケンカが強いその強さは《阿修羅》と言われた雄二を瞬殺できるほど。

しかし頭は残念で数学以外は壊滅的。

召還獣

装備

武器 素手か短刀

防具 ガツスーツみたいな感じ

腕輪

無し（無くとも身体能力が高い）

錦戸赤龍（レックス） ニシキドヒリュウ

所属クラス Fクラス

h i g h 1 6 0

特徴

茶色の髪に茶色の目で身長は明久ぐらい顔は結構かつこいい

かなりのめんどくさがりやで名前さえも自分で名乗らない

よく分からない謎のキャラクター

召還獣

装備

武器 不明

防具 不明

腕輪

《正体不明》



腕輪発動中はダメージを受けない。  
破壊された部位は強化され復活される。

攻撃力防御力とも爆発的に上がる

松村空 マツムラソラ

所属クラス Fクラス

h i g h 1 6 7

特徴

青い髪に紫色の目容姿は完璧だが少し何かが抜けている男

松村財閥系の副代表であり当然金持ち。

性格は適当という言葉が似合う男学校は車で来るが遅刻している。

実際は結構頭はいい。

召還獣

装備

武器 金の剣（長刀）・銀の拳銃

防具 ブランド物のスーツ（防弾防刃）

腕輪

《死角攻撃》キルオフエンス

敵の後ろに勝手にレポートして攻撃できる。

## 人物紹介1（後書き）

オリジナルキャラクター募集中

## ある意味チームワーク？

雄二「後みんなに報告しなくちゃいけない事がある」

梨香「何を言っただ勿体ぶらないで早く言え」

梨香が若干怒ってるのでニヤリと笑いながら

雄二「皆さんご存知の通り元バカ《吉井明久》が帰ってきた、しかし私達は明久を素直に祝福できないのだ」

秀吉「なる程明久は《彼女》をつくったのじゃな」

その言葉に雄二は目を丸くしていたが教壇を軽く叩いて

雄二「正解だ秀吉！異端審問会いやFFF団よこの事実を許す……

あれもつ教室にほとんどいなくなっただな」

雄二「さてと今の、冗談は置いて俺らは休むか」

レックス「単純なヤツはすぐ動く俺は関係無いがな」

空「俺が言っつのも何だがこのクラスやる気が無い奴多いな」

本当だよお前ほど適当なヤツテレビでしか見たことねーよ。

竜也「取りあえずノリだなしかし明久は本当のバカではなかったのか」

梨華「あんな冗談に騙されるのか、このクラスは」

雄二「アメリカにってる間に幼なじみの《工藤愛子》に教わったらしい」

まあ頑張れよ、明久生き残ってたらハンバーガーでも奢ってやるよ、あつ！勿論ポテトもつけとくぜ。

――――

所変わってAクラス

明久「なんだろすごい寒気がしてきた」

現在こちらはHRが終わり授業のまでの休憩時間中。

愛子「ん、何か外が騒がしいねアッキー」

優子「でもまさかね、バカバカ言われていた吉井君がAクラスなんてね」

翔子「…よろしく吉井」

Aクラスはいいな、女子がこんなに沢山いてFクラスなんて、むさ苦しい男ばっかだもんね多分。

何か入口がウルサイな何だろ見てこようかな

優子「私が見てくるは吉井君は座ってて」

木下さんが入口をみた後、後ろの手でメールを打ち始めているが……スッゴい早いよ打つの。

愛子「メールがきた何々……了解」

あれ何か声が低くなったような

愛子「取りあえず隠れてアッキー」

何だかわかってきたような気がするが何も考えないでおこつ。

そのあと霧島さんと愛ちゃんが入口に向かい何か言っているらしいがよく聞こえないし、分からない。

？「ヤッホー久しぶりだねアキ」

突然横から小さい声で囁かれたので僕は。

明久「うわっ！……ビックリさせないでよ知将さん」

唯「もお、唯でいいのに」

僕としては全然よくないよあつ！でも愛ちゃんって呼んだり秀吉は秀吉って言ってるもんね。

明久「よろしく唯」「ニコ

唯「明久君、後は頑張つて！」ファイト

何を頑張るんだろ……勉強かなまあおいていかれ……ギャー

「……………アアアア！」

愛子「アツキー何で唯ちゃんとイチャイチャしてんのかな？見間違  
い？ふふふ」

明久「い、い、いや愛ちゃんお、おちついて！」

翔子「…愛子吉井が可哀想あと唯吉井はオモチャじゃない」

間一髪（正確にいうと五秒前）愛ちゃんに殺される前に霧島さんが  
誤解を説いてくれた。

唯「ゴメンね明久君」

明久「うっうん一応生きてるから大丈夫」

愛子「ごめん何か気分が悪くて、ツツいつい手がでてしまったよ」

明久「だ、大丈夫全然痛くないから、それより木下さんは？」

僕がそう言つと霧島さんがピクッと反応して僕に抱き付いてきた。

明久「何してんんんん」

完璧に口を塞がれてしまった、勿論手で。

翔子「少し静かにFクラスが来てる」

よく耳をすましてみると

「別に中に入るぐらいいいだろ」

利通「悪いがバカは立ち入り禁止何だ、特に強行突破なんてもつてのほかだ」

「なら代表を呼べ！」

優子「代表はそんなに暇じゃないの分かる？」

「あーいえばこーゆうクソコッチの数は28人そっちは6人これで勝てると思ってるのか」

？「お前達には用など無いここから消えろ」

「誰だ！」

その時大きな声でこういった。

雅樹「西園寺雅樹だFクラスにいる竜也の兄だ」

力強い声が静かになった教室に響いた。



ある意味チームワーク？（後書き）

評価お願いします！

感想もどしどし送ってください

## 怪物の兄は大怪物

「嘘だろ…クソ一旦身を退くぞ」

おお帰ってくれるのか、雅樹君にお礼をしなければ

雅樹「さっさと消えるバカ」

「ちくしょう！おぼえとけよ！」タッタタ

走って帰ってくれたか最後のセリフ悪役がいうセリフだったけどまあいつか。

危機も去ったしお礼しにいきますか。

雅樹「忘れるわお前らなど」

優子「凄いわね雅樹、威嚇したの？」

雅樹「いや違うな多分俺の弟が今朝アイツらを絞めたんだろ」

何か楽しそうに話てるけど、話しかけるのも悪いけど一応お礼は早くいっておかないとね

明久「今回はありがとう雅樹君」

雅樹「気にするな明久前々からお前の事は話している後悪いが誰か飲み物買ってきてくれ」

愛子「僕が言ってくるよ！」

明久「えっ！誰それ？」

僕の顔を見るなり突然笑い出した。

雅樹「ハッハハ決まってるだろそれは……………あれだよ……………誰だっけ？」

明久「……………えっ！分からないのちゃんと聞「思い出した！秀吉だったはず」」

雅樹が秀吉っていった後突然優子はピククつとして

優子「秀吉は何て言ってたの？」

雅樹「秀吉は確か「明久に手を出すヤツは潰してもよいぞい」とか何とか」

そう言えば何でそんなに木下さん雅樹は仲がいいんだろまさか！

明久「君たちまさか付き合イツテエ！！何するんだよ！」

雅樹「ただの幼なじみだしかも優子の気持ちを知らずに」

優子「はぁ吉井君はバカなのか頭いいのか」

そうかならこうゆう考えだね

明久「木下さんいや優子、君は僕の事が好きなんだね」キラリン

決まってるよ絶対に今僕かなり輝いているよ。

明久は気づいていない回りから見たらスッゴいカッコ悪いということ。

優子「……へっ？ち、ちち違うわよ！だって吉井君は昔はバカだったしえーとだから……………」

雅樹「優子が壊れたな自分で何言ってるのか分からない状態まで進んでんの初めて見たわ」

明久「何か知らないけど僕、罵倒されたよね」

愛子「ただいまぁ！ジュース買ってきたよゝあれ？何か優子おかしくない？」

翔子「…話せば長くなるから気にしないの」

愛子「了解しました！代表！」

霧島さんがお母さんで愛ちゃんが子供に見える霧島さん何でしつけるのうまいの？

翔子「…愛情があればこんなの簡単」

雅樹「それよりジュース飲みたいんだが」

取ろつとしたジュースを誰かが止めに入った。

優子「それ私も飲みだいここはジャンケンで買った順で決めましよう」

愛子「待ってました！そんな事もあるのかと……ジャジャーン！《ハバネロサイダー》買ってみた」

愛ちゃん何でそんなの買ってんの人は結構死にやすいんだよ。

知ってるよね《ハバネロサイダー》なんて……辛いに決まってんじやん！！

翔子「…私も参加するでは一回戦」

皆の顔が本気になり始めた。

ジャンケンポイッ！あいこでしょ！（前書き）

人の意見は取り込むコレ重要ですね

それではどうぞ！

ジャンケンポイツ！あいこでしょ！

明久「（この勝負、負けられない）」

この場所のみまるでこれから戦闘でも始まりそんな雰囲気である。

女子には悪いけど、《本気》でいかせてもらう

皆「（…）最初はグージャンケンポイツ！」

愛子 グー

明久 パー

優子 グー

翔子 チョキ

雅樹 パー

愛子「ここであいこはきついね！」

確かにそうだ、大人数でのジャンケンでは長期戦はキツイさつと上がらないと、絶対に《ハバネロサイダー》なんて飲みたくないからね。

明久「…じゃあいくよ」

皆「あいこでしょ！」

愛子 パー

明久 グー

優子 グー

翔子 グー

雅樹 パー

愛子「やった！僕の勝ち！」

雅樹「悪いが俺はコレをもら」それはもう一回戦で決めるよ」「…了解」

ヤバいこのままいくと……………ってなんか霧島さんが少し震えてるよ  
うな。

優子「いくわよ最初はグージャンケンポイッ！」

明久 パー

優子 チョキ

翔子 グー

翔子「…くっ絶対負けない」



優子「ハア…絶対負けないんだから」

あれ？何かいつも霧島さんと木下さんじゃないよだって霧島さん、若干目つきが怖いもん。

翔子「…始めるジャンケンポイツ！」

明久 グー

優子 パー

翔子 グー

優子「か、かかかか買ったあ！！！」

…嘘だこんなに負けるなんて次は絶対勝つ！！！！

明久 翔子「絶対に勝ってやる！」

愛子「何か代表の言葉使い変わったような」

ジューズを飲みながら言われるとかなり羨ましい！早く僕も飲みた  
い！

明久 翔子「ジャンケンポイツ！」

明久 パー

翔子 グー

買ったあ！霧島さんには悪いけど《ハバネロサイダー》は飲まなくて……

そして僕が横を見るとガクンとうなだれてる霧島さんがいた。

そして霧島さんは

翔子「…うつ…飲みたくないよぉ」ヒクヒク

うつ…霧島さん泣きそうになってるよー応僕は男だ！こーなったら！

明久「霧島さん僕が飲むよ！」

翔子「…あ、ありがとう吉井は本当に優しいノノ」

明久「いやそんな事ないよさて飲んでみるか」

グビグビ

明久「うつ辛い喉が焼けるうつ！……………」バタ

「だ、大丈夫 キー…よ」

「…私…せい」

誰かの声か分からないでも一応聞こえてる。  
でももうだめだ。

僕の記憶はここまでこの後？気がついたら僕はAクラスのソファ―  
ベットの上で寝ていた。

愛ちゃんの説明によれば僕は《ハバネロサイダー》を一気に半分以上飲んだらしいそのあとぶっ倒れたらしい。

明久「ん、ん？ここどこ？」

翔子「…ごめんなさい吉井…く、君大丈夫？」

愛子「ふう良かったアッキー心配したんだから」

そう言えば何で二人とも、僕の真横にいるんだろ。

あつ！雅樹どうしたんだろ。

雅樹「なあ明久お前は何でそんなにモテルんだ？」

明久「僕がモテル？冗談はよしてよ愛ちゃんが僕みたいなのと付き合ってくれてるだけでうれしいのに」

雅樹「（自覚が無いハーレム状態の奴を見ると俺でも腹が立つな）」

そんな話をしていると僕達の教室を叩く音がした。

優子「誰かしら？」

扉を開けて見るとそこには赤い髪をした男そう、《ゴリ》間違えた《坂本雄二》がたっていた。

そして雄二は爆弾発言をした。その言葉は場を氷つかせた。

雄二「俺達FクラスはAクラスに宣戦布告する」

## まさかの宣戦布告

雄二「時間はこちらで決めさせて後日発表する」

翔子「…雄二達はそれで勝てるの？」

雄二「それでだこちら側としては5対5の《一騎打ち》がしたい教科はそちらで決め手いい」

今の雄二の作戦あっち側がとても不利に見えるけど、普通に戦ったら勝率が三割だとしたら一騎打ちはだいたい五割になる……わかったよね？…説明下手？悪かったね。

優子「いいんじゃない代表」

翔子「何でAクラスにそんなにこだわるの？」

雄二「そんなのどーでもいいだろ俺達はこれからBクラスを潰していくので」

雄二はドアの方に歩きながら手を顔の近くでヒラヒラさせると外にいたってはメンバーと合流していなくなった。

明久「僕も勉強しとこ」

翔子「…吉井は何を勉強するの？」

明久「僕は英語だよコレだけは学年一位だからね」

霧島さん顎に手を置いて何か考えるポーズをしていた……可愛……大丈夫変な目では見てないから。

翔子「…確か英語は私四位だった点数は405点だった後二人は誰？」

明久「多分愛ちゃんだと思う」「よんだ？アッキー」ねーねー英語の点数何点だった？」

愛子「保健体育と同じだから……638ぐらいかな」

それぐらいかでも気になるな愛ちゃんと霧島さんの間の順位なのに多分Aクラスにいない人。

翔子「…そういえば吉井は何点だった？」

明久「僕は、……だったよ」

そんなにビビるのまるでバカだったはずみたいな顔をして。

翔子「…やっぱり凄いで私のかことは覚えていない」

霧島さんの声聞こえないな、なんて言っただろ？

明久「霧島さん何かいった？」

翔子「…何でもない」

だったらいいや。さて始めますか絶対負けられないからね！

・・・Bクラス

レックス「何だ何だお前らそんなもんかだリーのに参加している俺の気持ちにもなれよ」

空「さつさと終わらせて帰るか」

二人「サモンッ！」

試験召還フィールドが大きく広がった。

空「（待てよレックスの本名がでるんじゃないか）」

物理

Fクラス レックス 401点

& Fク

ラス 松村空 406点

VS

Bクラス 垣内紘 141点

& 竹内相

乗 156点

相乗 空「嘘だろ」

何で、コッチの方もレックスなんだよ！

レックス「いやリアルだ」

その言葉の後、相乗の召還獣は吹っ飛んでいった。

空「やるな！俺もいくか」

空「拳銃は使い方によってはこうゆうほうが当てる確率増える」

召還獣は右手持っている金の剣を適がない右側に投げるとそこに銃弾を当て…

紘「まさか！」

空「二つの意味で遅い（襲い）！」

紘の召還獣の脳天を撃ち抜いた。

空「行け！雄二、秀吉」

雄二「よく頑張った行くぞ秀吉！」

二人は近くの物陰から姿を現して走ってBクラスの中に入った。

根元「やあ遅かったなFクラス」

雄二「いやいやアンタらの部下補修室に送ってたら遅くなっちまったよ」

若干根元の顔が曇ってきたが今は無視して！

雄二「サモンッ！」



古典

Fクラス 坂本雄二 276点

VS

Bクラス 根元恭二 219点

雄二「そんなもんかさつさと補修室行けザコ」

雄二の召還獣のパンチ一発で沈められた。

Fクラス勝利

## 英語VS英語の一方的なたたかい

優子 side

今日の気分は朝から最高だわ。

なぜかって今日は私の大好きな《本》が届いたから。

優子「ふう朝から気分絶好調！」

翔子「…どうしたの優子？」

優子「い、いえ別に何でもありません」

危ない、まさか代表がいたなんて…でも何だろ心が満たされないよ  
うな。

「失礼するぞ」

誰かしらこんな朝早くAクラスに来るなんて。

雄二「Aクラス代表はいるか」

優子「いるわよ何で？」

雄二「今日の午後に《試験召還戦争》を始める、それだけじゃあ  
な」

それだけ言っと雄二は帰っていった。

優子「だって代表聞いてた？」

翔子「…聞いてたよ…明日の午後でしょ？」

違うよ代表…今日って言ってたじゃん。でも逆に可愛いかも…

優子「今日の午後ですよ代表」

翔子「…分かった」

ならいいか

今日の午後

先生「コレよりAクラスVSFクラスの試験召還戦争を始めます」

明久「僕が行くよ、いーよね霧島さん」

翔子「…吉井は強いからどこにいても平気」

明久「では先生、英語をお願いします」

Fクラスからは…女の子かな手加減した方がいいのかなあ？

梨香「おい、キサマ手加減したらリアルの方でぼこす」

明久「別に関係ないからかいいよ」

明久 梨香「なら話は簡単だ（ね）！いくぜ（よ）！サモンッ！」

英語

Fクラス 獅童梨香 443点

VS

Aクラス 吉井明久 1294点

明久「君が英語の順位が3位なのは」

梨香「…1000点越えて…勝てる訳ない」

当たり前じゃん僕に英語で挑んだ時点で負けは決まっていた。

明久「腕輪発動！」

明久の召還獣が光り出して…それがやむと

明久「最初に言っておく此処はお前の知っている空間じゃない」

梨香「だったら私だって腕輪発動！」

梨香「あれ？腕輪発動！……………」

明久「出来るわけ無いじゃん此処は僕以外の腕輪は使えない物質が存在しているから」

腕輪なんてめんどくさい物使わせる訳が無いじゃん気がつかないのかな？

まあいいかそれではショーを始めよあ！

明久「展開！《暗黒物質》」

梨香「その羽は何」

明久の召還獣の背中からは二本の白い羽が生えている。

そして顔には何かの仮面を付けている。

明久「終わりだ…おつと最後に「僕に常識も非常識も通用しねえ！」」

梨香の召還獣は手も足もでず梨香の召還獣が爆発しバラバラになった。

そして上空からは、召還獣の破片が落ちてきた。

先生「勝者Aクラス」

当然の結果までだな。

英語VS英語の一方的なたたかい（後書き）

感想、評価お願いします！

オリジナルキャラクター募集中！

翔子の妹は……最強（前書き）

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！

最近また検索数が増えてきてとてもうれしいです（T|T）

是非とも頑張らせてもらいます！

翔子の妹は……最強

明久 side

先生「それでは二回戦目始めます」

空「俺がいこう、ここで一勝しておいた方が後々楽だ」

あつちからはチャラそうな男がコッチは誰がいくんだろ。

？「翔子…私が行くよ…すぐ終わらせるから…いいよね？」

僕達の後ろから一人席に座っている女の子が霧島さんに話しかけているようだが、誰だろあの子？

翔子「…《翔香》は出なくていい」

明久「いいんじゃないの出たいてってん「絶対ダメ！」何でさ、出たいならコッチ来れば？」

翔香「ありがとう…そして久しぶりだね《明兄》…」

この呼び方聞いた……まさか！

明久「愛ちゃん！覚えてる、近所に……でも名前が違ったようだな？」

翔香「そうだよ…旧姓は《逆旗》…」

愛子「思い出した！小学校の…」「…四年生で転校した」そうそう！



って何で教えてくれなかったの」

翔子「…覚えてないと思ったから」

翔香「その話は後で…その前に…戦争」

そうだった！若干あつちの人機嫌悪くしてるよ。

空「感動の話は後でにして早く殺ろうぜ」

翔香「始めよう…私も…頑張る！」

翔子「…前髪上げて此处まできたら、本気で」

翔香さんが神を上げてるけどスッゴい霧島さんに似てるなさすが姉妹。

ん、ん目を閉じてるけど何でだろ、集中してるのかなあ？

翔香「ん、ん……本気で行く！」

明久「オッドアイなの！翔香さん」

そう翔香さんの目は片方が青色、もう片方が黄色というオッドアイなのだ。

翔香「さんはいらない…翔香でいい」

明久「わ、分かった頑張って翔香」

翔香「頑張るよ明兄／＼」

あれ？待って何で顔赤くしてんしかも…

愛子「あれ？アッキーそろそろ身体で分らせるよ？」

だ、誰か助けて！

雅樹「頑張れ！明久」

-----

翔香「明兄…だ、大丈夫？」

無理だよ僕はもう死んでるから。

先生「それでは、古典で」

翔香 空「サモン」

古典

Fクラス 松村空 326点

VS

Aクラス 霧島翔香 400点

翔香「アナタは…私に勝てない…何故なら……《武器はアナタに味方をしない》」

空「ハア何いって……うおお！何だ！」

突然、空の持っていた武器は上空に向かって飛んでいった。

翔香「武器は…私の味方…くたばれ」

そして、空の剣は音速を越えて召還獣の腹に刺さった。

翔香「さようなら」

最後は自分の腰に掛かっている。

白い機械の剣を出すとそれが赤く変色し始めた。

そして切り裂いた。

空「負けた！強いな！俺も勉強し直そ」

なんとAクラス2勝め！

翔子の妹は……最強（後書き）

感想、評価お待ちしております！

## 保健体育の対決（前書き）

朝私は早く書いて投稿するがもつとなのですが……………なんやねん  
！ネットワークに繋がらないって！

というわけで短い文章かつ駄文ですがどうか皆様のご期待にそえる  
よう頑張らせて頂きます。

それではどうぞ

## 保健体育の対決

明久side

現段階僕達Fクラスの方がかなり優勢だ後一勝すればいいのだからでも何で雄二は焦らないだろ。

雄二side

まあここまでは俺の予想通りに進んでいるしかし、《霧島翔香》がアイツは予想外だったな。

明久side

翔香「勝ったよ…皆…」

さて次は愛ちゃんの番かなさて僕は休んでおこう。

翔子「…次は愛子お願い」

愛子「了解したよ…ムツツリーニ君久しぶりに始めようか」

康太「…望むところだ工藤愛子！」

負けないでね愛ちゃん！ムツツリーニは本気で来ると思うから。

先生「それでは、始めてください」

康太「…《保健体育の神》に挑む時点で間違ってる」

愛子「引き吊り落としてあげるよ」

愛子 康太「（…）サモンッ！」

保健体育

Fクラス 土屋康太 465点

VS

Aクラス 工藤愛子 ???点

雄二「ん、ん？どうゆうことだ」

雄二が眉毛を少しつり上げて言うと愛子是不適な笑いをしながら。

愛子「ふふふ、簡単だよ僕の点数はコレだけだよ」パチン

愛子が指を鳴らすと…

保健体育

Fクラス 土屋康太 465点

VS

Aクラス 工藤愛子 500点

康太「… たった35点差か」

愛子「勝てるの？腕輪発動行け！《雷鳴》！」

康太「…この世界は速さが全てだならスピードは俺が貰う！」

その瞬間フィールド内の時間の流れが変わった。

愛子「どうゆうこと！」

康太「俺の腕輪の能力は《普通の空間の数万倍で動く》物だ」

康太「…終わりだ」

康太の召還獣は全く動かない愛子の召還獣の首を二回ほど切り、空間を戻した。

ブシヤヤアアア！！

召還獣の首から噴水のように血が出て倒れた。

先生「勝者Fクラス」



西園寺流VSレックス+代表戦勝つのは……（前書き）

タイトル長い！

さてそれでは今日から始まる、《文月学園相談室》始めましょう！

明久「僕が最初か、あの……最近のゲームは何が流ってるの？」

そして今日の相談員は！

霧島翔香さんです

翔香「だったら…PS5の…大海戦general…だね」

明久「…それ18禁の奴だね！」

翔香「そう…人を殺すヤツ…だよ」

まさかの戦争ゲーム好きの翔香さんでしたさようなら…

## 西園寺流VSレックス+代表戦勝つのは……

明久side

愛子「ごめん皆…負けちゃった!」

翔子「…大丈夫まだこっちの方が有利」

まさかねムツツリー二が僕と似てる空間を操る腕輪とは思わないしね。

だったらもつと早く倒せたんじゃないかな。

まあいつか、さて次は誰が出るんだろ雅樹かな?

雅樹「俺の番かFクラスは誰が出るんだ」

レックス「兄弟対決がみたいけど俺だわ」

雅樹「誰でも変わらんよ」

戦いも終盤になってきたけど、コレほど不機嫌な戦い初めてみたよ  
だって雅樹…メツチャメチャ怖い笑い方してるもん

雅樹「勿論教科は、数学だ」

先生「それでは始めてください」

レックス 雅樹「サモンツ!」

数学

Fクラス 錦戸赤龍 401点

VS

Aクラス 西園寺雅樹 412点

雅樹「Fクラスには結構頭がいいやついるんだな」

赤龍「…………俺の名前が出てしまった」

雄二side

はぁーアイツの名前、赤龍っていうのかだからレックスなんだな。

明久side

スッゴい格好いい名前だな、僕もあんな名前が良かったよ。

赤龍「俺の武器は《鈎爪》だ切り裂いてやるよ」

雅樹「家はな日本では珍しいCQCの流派の一つなんだよだから俺は素手もしくは拳銃だ」

何で二人は自分の召還獣の武器を見せ合いつこしてんの。

二人「うおおおお！！！！！！」

そして二人は真っ正面からぶつかった。しかしどちらの召還獣も無

傷で次は音速を超えながら至る所でぶつかっている。

雅樹の召還獣は拳銃を撃ちながら赤龍のわき腹蹴ったりしている。

赤龍は拳銃の弾丸を弾きながら雅樹の防具を切り裂いている。

雅樹「クソ拳銃を使いすぎた」

赤龍「俺も地味に鉤爪を振動させてたからな」

数学

Fクラス 錦戸赤龍 36点

VS

Aクラス 西園寺雅樹 37点

二人「これで終わりだ!!!!!!」

二人の魂の聲が交差した時事件は起きた。

数学

Fクラス 錦戸赤龍 0点

VS

Aクラス 西園寺雅樹 0点

明久「…嘘でしょ」

二匹の召還獣は交差する前に能力を使いすぎて……死んだ。

先生「この勝負引き分け」

なんとも締まらない4回戦目だった。

明久「雅樹格好悪すぎだよ」

雅樹「知ってるよ…格好悪すぎたな」

翔子「…このままじゃ面白くないから…教科の選択権をアッチにあげる」

嘘でしょ相手は雄二だよ！そんな事したら…でも信用しなくちゃ。

雄二「では、ありがたく貰うは」

翔子「…何でやるの？」

そして雄二はニヤリと笑うと先生に向かって。

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで100点満点上限無し」

先生「えっ！は、はいそれでは視聴覚室まできてください」

先生最初のほう声がうらがえってるよ…まあ代表同士の戦いが日本史の小学生レベルなんて思わないよね。

雄二「勝てるは」

翔子「…そんな事は分からない」

日本史

Fクラス 坂本雄二 94点

VS

Aクラス 霧島翔子 98点

雄二「…しまった書き間違えた！」

翔子「…私は年号間違えた」

雄二side

まさかの誤算だ俺が…間違えるなんて、考えが浅かったか。

先生「勝者Aクラスです」

西園寺流VSレックス+代表戦勝つのは……（後書き）

オリジナル小説書きましたぜひ見てください！

## 清涼祭の準備1

結局試験召還戦争の結果Aクラスが勝利を収めた、そしてFクラスの設備が1ランク下がるという結果になった。

そして現在、吉井明久はAクラスで何かの準備の為の話し合いに参加していた。

明久「今回の清涼祭は何をやるの？」

翔子「…私達はメイド・執事カフェをやる」

明久「……………（よし！）」

雅樹「残念だったな明久、今回お前は執事をやって貰う」

そして僕は地に落ちた、何がか気分と生命力かな。

愛子「そんなに落ち込まなくてもだったら僕は《裸エプロン》でもやってあげようか？」

明久「……………ブファー！！！」

雅樹「だ、大丈夫か！明久ゆ、輸血パックを！」

…クソ僕の人生はここまでか…出血多量で…死ぬなんて。

康太「…助け声が聞こえたから持ってきた、輸血パック（明久専用）」



雅樹「助かった土屋」

愛子「ご、ごめんね」

さすがにこの血の量じゃ…………リアルに死ぬかと思った。

しかし皆のメイド服かぁ…こんなチャンスはめったに無いから写真でも……………って！僕写真取る技術も道具も無いじゃん！

康太「（…明久今回アメリカ帰国祝に写真三枚をただでやる）」

明久「（本当！だったら……………待ってそれを四枚にしてくれる？）」

康太「（…何故だ？）」

明久「（愛ちゃんのメイド服姿も貰っておくから）」

僕がそうゆうとムツツリー二事、土屋康太は（了解した）と言つとAクラスの窓から飛び降りた。

翔子「…そう言えばまだ料理を決めてなかった」

優子「そうねこん中で料理ができる《女子》いる？」

明久「ち、ちよつと待て僕も作れるよ」

雅樹「何で明久が出てくるんだよ」

当たり前じゃないか僕の執事の服なんて誰も見たくないだろ。

それだったら、僕よりスタイルのいい雅樹の方がいいじゃん。

優子「吉井君、料理できるの？」

愛子「断固反対する！だってアッキーの料理の腕はそこのシェフよりはあるよ」

翔香「なら…明兄にやらせれば…いいんじゃない」

愛子「皆多分やる気なくすよ？」

明久「じゃあここに置いてあるやつでなんか作るよ待ってて」

僕は走ってAクラスに設置されている台所？に向かっていった。

――――

台所

明久「さて、ここには何があるんだろ？」

薄力粉に卵、砂糖、シナモン、ベーキングパウダーが入っていた他にもあったが……

明久「よし！ビスコッティでも作るか」

さてまず、全ての食材を混ぜて（上にかける砂糖以外）そして楕円形の長方形に伸ばす。

砂糖を上表面にかけて、180°のオーブンで20分焼く。

焼いたら厚さ一センチに切って面積が多い方を上にして160°で10分焼くと、焼いたらひっくり返して10分。

明久「完成！意外と時間がかかったな」

さて持つて行くか。

――――

Aクラス

明久「持つてきたよ」

愛子「あ！ビスコッティじゃんコレおいしんだよね」

優子「ビスコッティ？まあ食べて……おいしい！」

そして周りからも《コレはうまい》《おいしいね》など声が聞こえてきた、ふう良かった！マズいなんて言われたら……ねえやじゃん。

翔子「…では採用でそして吉井は必要なとき意外調理室でも念の為《執事の服》はきておいて」

翔香「私も…調理室…よろしく明兄」

明久「よろしく、翔香」

こうして僕は、調理室行きになった、いや良かった！

## 清涼祭準備・当日！

僕は今、大変悩んでいる、解決策……有ることは有るだが僕の命がねえ！聞きたい？というか聞いて！！

ほんの10分前

明久side

明久「ん、ん誰だろ今メール送ってくるなんて？」

送信者は……愛ちゃんかどうしたんだろ、メールの内容は……「一緒に《召還大会》に出ない？」……召還大会？なにそれ。

Aクラスの掲示板をよく見てみると……

明久「なになに……えっ！！優勝者は食券一年分！に新しい腕輪だって……！！」

明久「よし、……ん、んまたメールだ」

送信者は……木下さん！何だろ？「《召還大会》一緒にやらない？よければメールして」………何だって……！！！！

明久「ヤバイよ……だったら雅樹とやればいいんだ！」

雅樹「呼んだか？明久」

ナイスタイミングだよ雅樹、コレが最後の方法だ！

明久「一緒に《召還大会》出ない？」

雅樹「いいぜちょうど、コレ見ててな」

明久「なに、食券が欲しいの？」

雅樹「まあそれもあるが、腕輪だぞ！気になるもんだろ」

そっちね…僕は現在危機的状況でもアルからね食券は頂いていこう。

明久「よし行くか！」

雅樹「行くぞ！」

こうして僕の命は助かったように見えたがそれは勘違いだった何故なら《召還大会》の相手が、霧島姉妹に愛ちゃんと木下さんのペアと戦うなんて。

清涼祭 当日

明久「スッゴい人だな…こんなにくるもんなんだ」

現在僕は、Aクラスにあるでっかい調理室でビスコッティ以外のお菓子を女子のお菓子が作られるメンバーで作っている。

「すみません、ビスコッティと紅茶のセットを3つ」

「レモンティを4つ」

雅樹「いい感じじゃねえか」

優子「そうねこんな風になるもんなのね」

雅樹「おっと！そろそろ時間だ明久借りて行くぞ」

明久「そろそろ時間だね…行くか」

愛子「僕達も行くよ優子」

そして僕達は《召還大会》をやるドームに移動した。

ドーム内

先生「さて、今年も始まりました！今回の大会に参加してくれたチームは45組です！」

去年を知らないから何も言えないけど、結構皆参加しているね。

雅樹「そう言えば、坂本達もでるらしいぞ」

明久「アソコとはいえ当たりたくないね」

先生「それでは、一回戦を始めます！教科は《物理》です！」

先生「そして一回戦はこちら！」

教科 物理

2年Aクラス 西園寺雅樹&吉井明久

VS

2年Bクラス モブ1&モブ2

高橋「それでは、始めてください」

四人「」「」「サモンツ！」「」

物理

2年Aクラス 西園寺雅樹 359点

& 吉井明久 279点

V S

2年Bクラス モブ1 201点

& モブ2 197点

雅樹「楽だな」ニヤリ

雅樹の召還獣はいつの間にか、敵の召還獣の後ろに回っていた。

モブ1「なんだって！」

明久「遅いよ」

モブ2「しまった！」

そして僕は首を切り、雅樹は首の骨を折った。

明久「楽勝だね」

雅樹「さて次は誰かな」

明久達はBクラスを瞬殺したため、観客がザワザワしているところがあった。



清涼祭準備・当日！（後書き）

新しいバカとテストの小説書いたので見てくれると光栄です。

オリキャラ募集中どしどし送ってください

ためらいなど入りません！

## Fクラスに敵そして誘拐！？（前書き）

### 文月学園相談室

明久「何か知らないけど僕が相談員になりました」

明久「ここに呼ぶのは面倒なので、お便りでやります」

明久「何々皆も送りたい？待ってました！皆送って来てね」

明久「どしどし送って！僕が皆の質問に答えるから」

Fクラスに敵そして誘拐！？

明久「ふうよかった一回戦勝てて」

雅樹「あれぐらいは勝てるだろ」

今僕は、Fクラスに向かっている何故か？何かFクラスが面白いことをやってるらしいから、誰情報か確か！木下さんだったけな。

Fクラス

雅樹「入るぜ」

明久「あれ？お客さんいないの？」

なんとFクラスには、お客さんが誰もいないのだ。

秀吉「お客は全員喜んでくれたのじゃがな」

雄二「2人を除いてな」

明久「雄二？」

雅樹「なる程、妨害を受けたか雄二で検討はつくが……………」

雄二「で、ムツツリーニ場所は分かったか？」

突然天井の板が外されそこから忍者の格好をした、ムツツリーニが出てきた。

康太「… Aクラスで… Fクラスの悪い噂を大声でいっていたが注意した、工藤、霧島姉妹そして、Fクラスの獅童が連れ去られた」

明久「何だって！絶対ぶっ飛ばしてやる！」

雄二「何やってんだよ、梨華」

雄二は頭を抱えてうなだれていた。

僕がFクラスの教室を出ようとするとドアが開き木下さんが慌てた感じで入って来た。

優子「はあ… 吉井… 君… た… いへん…」

多分、僕達に皆がさらわれたのを教えるために走って探してくれたのだろ、木下さんの顔がかなり赤くなっていた。

明久「大丈夫、すぐ連れ戻すから」

優子「獅童さんもさらわれたの！」

獅童さんって確か雄二の幼なじみだったような。

康太「… 場所は、体育倉庫、今竜也と赤龍が向かってる」

そして、僕と雅樹、雄二は体育倉庫に向かって走った。

-----

## 体育倉庫

体育倉庫では、5人の別の学校の学生が霧島姉妹と工藤、梨華を縄で縛っていた。

梨華「この縄ほどけたらただですむと思うなよ!」

「黙ってけ!」

梨華はその男に一発殴りを入れ気絶させた。

「コイツを囷に《双子の神殿》と《赤きドラゴン》は来るのか?」

「わからねえよ、」

そんなクソみたいな話をしていると、ズドン!という音が体育倉庫にひびいた。

赤龍「悪いね、営業妨害しないでくれる面倒なことかけないでよ」

竜也「兄貴はまだかなら、俺達だけで潰すか」

「きたぜ《赤きドラゴン》と《双子の神殿》の一人が!」

明久「違うよ、《悪鬼羅刹》もいるよ」

雄二「悪いな、誰だか知らないが此処から消えてもらうは」

「へっ!早速始めようぜ」

雅樹「真っ正面からかかってこいよ！」

そして僕達による戦闘が始まった、正確にいうと僕達による《圧倒的な虐殺》かな。

――――

3分後

雅樹「これぐらいでいいかな」

明久「弱いな」

雄二「明久お前こんなにケン力強かったか？」

明久「水泳やってたら筋肉がついてね後アメリカだから絡まれると思っ  
て鍛えたの」

雅樹「まあ終わりだ」

僕達の圧倒的な虐殺はすぐに終わった。

まず最初に雄二が敵をラリーアットで一人沈め、雅樹と竜也が何か協力技で二人沈めて、僕は回し蹴りで一人沈めて赤龍は………人間にやっていいのか分からない技をやって沈めた感じかな。

赤龍「…なんか手応えが無いな」

雄二「帰るぞ、皆」

僕達は皆の縄をほどいて、教室に帰っていった。

Fクラスに敵そして誘拐！？（後書き）

オリキャラ募集中です。

明日は人物紹介2をやります！見てね！

明久の相談室もよろしく！



## 人物紹介2（前書き）

明久の相談室

明久「お便りは……………着てない！」

雅樹「明久応援メッセージはきてるぞ」

作者「本当！やったよ本当に思いつきで書いて良かった」

明久「作者は下がってて」

雅樹「明久相談室、誰も送ってくれないな」

明久「何で？送って相談質問しっかり答えるよ！」

雅樹「まあ俺としても送ってあげてくれよ」

明久「それでは、送ってね！待ってるよ！」

## 人物紹介2

西園寺雅樹 サイエンジマサキ

所属クラス Aクラス

h i g h 1 7 3

特徴

今作品のサブメインキャラクター

灰色の髪に程良く筋肉がついていて長身

ケンカがとても強く弟の竜也でさえビビらせるほど。

明久とは最近知り合った中だが行動するときにはほとんどこの二人で進んでいる。

勘が良く自分で考えた予想が当たることが多い。

木下家とは幼なじみ

召還獣

装備

武器 素手または拳銃

防具 スニーキングスーツ

腕輪

《パーフェクトブリザード》

氷を操ることができる。

霧島翔香 キリシマシヨウカ

所属クラス Aクラス

Size B83 W56 H79

height 158

特徴

霧島翔子とほとんど同じ外見をしているが目を前髪で隠している。

目の色が左右違う《オッドアイ》である。色は右目が青 左目が黄色

会話文に「…」が入る。

召還獣

装備

武器 高周波ブレード「気になったら検索を」 コンバットナイフ

防具 白いパワードスーツ

腕輪

《?》

相手の武器を自由自在に操れる（発動中は一秒一点）減らされる。

闇片秋波 ヤミカタシュウハ

所属クラス Aクラス

Size B 84 W 54 H 79

height 156

特徴

なかなか皆と話すことができず休み時間とかは本を読んでいる。

明久がきっかけで翔子とかと話すようになるも、しゃべるのが苦手  
で身振り手振りで物事を伝える。

すぐに顔が真っ赤になることも、嘘をついてもすぐばれてしまう。

召還獣

装備

武器 仕込み刀（ステッキの中に隠されている）

防具 黒いジャケットにジーンズそして男物の帽子をかぶっている

腕輪

？

知将唯 チシヨウユイ

所属クラス Aクラス

Size B84 W57 H78

height 160

特徴

いつもテンションが高く明久をからかっている。  
戦う場面が少ないため、成績は良く分らない、Aクラスにいるの  
だから頭は多分いい。

召還獣

装備

全て不明

応募ゾーン！！

黒柳大和 クロヤナギヤマト

所属クラス Aクラス

h i g h 1 6 9

## 特徴

容姿は a n g e l b e a t s ! の音無結弦の髪を黒くした感じ。

気さくな性格で誰からも好かれる主に一年生。

喋るときは、丁寧語

少し変わり者なので趣味として、色々な情報を集めている。

得意科目が物理で物理の点数が明久のようにづばぬけている。

アメリカメンバー全員とともに転校してくる。

恋愛事には少し鈍感（明久ほどではない）

総合得点は4095点

召還獣

## 装備

武器 日本刀の二刀流

防具 黒い甲冑

腕輪

ギャンブルダイス

一回につき50点消費、六面体のサイコロに「大吉」「小吉」「大凶」の3つが2つつある。

ただし自分の召還獣のみの腕輪

効果

大吉 (元々の点数ー50) + 50 × フィールド内にいる召還獣

小吉 点数が80点回復する (元々の点数ー50) + 80点

大吉 フィールド内の見方の召還獣が全滅する「自分も含めて」

## 人物紹介2（後書き）

何か待ってます！

明久「送ってね」

雅樹「感想、ダメ出し何でも送ってくれ」

明久「忘れないでよ！僕はどんな質問にも答えるから！！」



準決勝！そして孤立した少女！？（前書き）

明久「さて、今日お便りがきたんだ」

雅樹「何々……………（秋波さんの3サイズを名前だけで判断しましたスイマセン）誰だ？秋波って」

明久「そうか、まだあってないのか雅樹は」

そこで秋波さんの登場で—————す！！！！

秋波「な、何で、わ、私がここに？」

明久「コレについてどう思う？」

秋波「……………私って地味な女っていうのは知っていましたが……………」

明久「まあ謝ってるし大丈夫だよ」

秋波「そんなに地味ですか！だったら私の胸触って見てください！」

雅樹「俺暇だから帰るわ」

ギヤアアアアアアアアア！

明久「逃走！」

吉井明久の答え

明久が逃走しましたため答えられません

闇片秋波の答え

私は3サイズは気にしてませんよ、でも地味って言わないでください  
ね

準準決勝！そして孤立した少女！？

先生「さて、次は準準決勝一回戦目の対決です」

何とか間に合った確か僕達は二回戦目だね。

先生「それでは、対決者あがってください」

そしてあがってきたのは……

明久「愛ちゃん！？」

愛子「アッキーここで勝って僕達と勝負しようよ」

へっ？どうゆうこと、しかも愛ちゃんの相方って誰なの？

優子「あら、私達が誘ったのに吉井君はそれを断って雅樹と組むの」

明久「い、いやこれには深いじ、事情があって」

雅樹「焦るな明久どちらにせよ勝つのはオレラダ」

いやそうじゃなくて！！木下さんと愛ちゃんが出た理由って、僕を倒すためだね！絶対そうでしょ。

愛子「さっさと倒しますか」ポキポキ

優子「ふふふ、楽しみだわ」ポキポキ

ギヤアアアアアアア！……まだ死にたくないよおお……こ  
ーなったら！

明久「僕達「棄権しようか？ダメだ」……そーだ！わざと「負けた  
ら許さない」……」

明久「僕いったん教室帰るよ」

ここにいたら何か押しつぶされそうだ。とにかく教室に帰る。

――――――――――

Aクラス教室

今は、メイド・執事喫茶は開いておらず中には人が……いた。

その子は髪がショートカットで僕と同じTシャツを着ている。

明久「あゝ君何してるの？」

？「い、いや独りが落ち着くので」

その女の子は何故か身振り手振りで物事を伝えようとしているが……  
……そんな事しなくても伝わるが。

？「あとう、アナタの名前はですか？」

明久「僕？僕は吉井明久だよ君は」

？「私は……や、や、闇片しゅ、秋波です」

何でそんなにビビってるんだろ？僕そんなに怖い顔してたかな？

秋波「い、いえ、してませんよ」

明久「よかった……………何で僕の考えてたこと分かったの！？」

秋波「そ、それは、た、たまに人の心が読めるんです」

す、すごい！まるでアニメみたいだね。

秋波「で、私にようがあつてきたのですか？」

明久「用が無きゃ話かけちゃ駄目なの？」

秋波「そ、そんな事は無いけど……………」

闇片さんには悪いけど……………闇片さんってこのクラスに馴染めてなかったのかな？

明久「闇片さん、僕と《友達》にならない」

秋波「ほ、本当ですか！こ、こちらからもお、お願いします！」

何をお、お願いされたんだろ……………まあいつか おっと！そろそろ《召還大会》の僕達時間だ行かなきゃ！

明久「それじゃあね闇片さん、あつ！僕の試合見に来てよ！」

秋波「人が……………大丈夫だって！……………分かった、見学させていただきます」

コレは何としても勝たなくちゃね。自分から見てって言いながら負けるのは恥ずかしいからね。

そして僕は闇片さんを連れてドームに向かった。

準準決勝！そして孤立した少女！？（後書き）

感想お待ちしております。

準準決勝僕達VS最強の姉妹！？（前書き）

人物紹介2の所に1人増えました！見てください！

唯「私だよわ・た・し忘れたの？酷いな」



## 準準決勝僕達VS最強の姉妹！？

僕は先ほど、闇片さんと別れて今雅樹と一緒にいる。

雅樹「さて相手は誰だ」

明久「誰がきても本気でいかないと」

さて相手は誰かな。

先生「次は、二回戦目です両者出てきてください」

この大会戦うまで誰が相手か、分からない嫌なルールだね。

？「…相手は吉井達か」

？「まさか…明兄と戦うなんて…」

この声、しゃべり方まさか！霧島さん！

翔子「…味方どうして戦うなんて」

雅樹「だな、コレでどちらかが倒れるのか」

雅樹side

状況は最悪だな、俺はここで絶対に勝ちたい！だが此处で俺達が勝つてもコレからの勝率が低いなら……………

雅樹「明久ここは棄権するぞ」

明久「ヤダヨ本気でいかないと」

こんな所でやる気出すなよ…そこが明久らしいけどさ。

先生「それでは、モニターを見てください教科はこちらです!」

教科は……………数学かいけるな!

先生「それでは、始めてください」

4人「(…)(サモン(ッ!))」

## 数学

2年A組 吉井明久 364点

& a m p ; 西園寺雅樹 416点

V S

2年A組 霧島翔子 405点

& a m p ; 霧島翔香 375点

明久「いい感じじゃない」

雅樹「さっさと終わらせるぞ」

早速、翔子と雅樹は腕輪を発動させた。

雅樹「（絶対零度）（パーフェクトブリザード）凍りつけ!!」

翔子「《死と死の剣》（デッドオブデッドソード）すぐに終わらせる」

二人の召還獣は、雅樹の作り出した氷を、翔子が剣で消し去り。翔子の剣を雅樹の氷で動きを止められたりと、五分五分の戦いをしていた。

明久side

明久「さて僕達も行くか」

翔香「すぐ終わるよ… 明兄」

僕達も真っ正面からぶつかった、剣と剣の斬撃がとびあっていた。

明久「くっ！攻撃できない」

翔香「当たり前：負けない」

雅樹「ハアハア…何だよ意外と得点下がってんじゃん」

翔子「…やばいかも」

数学

2年A組 吉井明久 265点

& a m p ; 西園寺雅樹 133点

V S

2年A組 霧島翔子 118点

& a m p ; 霧島翔香 268点

雅樹「クソこうなったら！」

翔子「…一撃で決める！」

そして二人の召還獣が赤く光り出した。

雅樹「デスブリザードオオオオ！」

翔子「…煉獄切断斬！」

二匹の召還獣は、片方が赤もう片方が青そしてぶつかった！！

ズドオオオオオオン！！！！

## 準準決勝！勝者と敗者

雅樹と翔子の衝突により、辺り一面に爆風が広がっていった。

その爆風により、現在召還フィールドが煙に包まれている。

明久 side

雅樹「前が見えねえ、やりすぎたか」

本当だよ！これじゃ何が起きてるのか分からないよ。

こうなったら、無差別攻撃だ！

明久「ウオオオオオ！」

先生「何でしょう？吉井君が突然大声を上げました」

翔香「何してる…の」

明久「勝たなくちゃいけないんだ、雅樹もう一回を」  
アレ

雅樹「……勝てよ明久「分かってる」なら逝くぜ！デスブリザード  
！！」」

雅樹が叫んだ瞬間、突然全ての煙が消え失せ氷付けの一匹の召還獣と足が凍ってる召還獣が出てきた。

明久「悪いけど、僕達の勝ちだ！！」

そして明久は足が凍ってる召還獣の首を切断した。

## 数学

2年A組 吉井明久 154点

& a m p ; 西園寺雅樹 0点

V S

2年A組 霧島翔子 0点

& a m p ; 霧島翔香 0点

先生「勝者2年A組吉井、西園寺ペアです」

良かった〜勝てて、闇片さん見てくれたかな？

そして僕達は、皆のいる場所に向かった。

-----

溜まり場

愛子「おめでとう、アッキー！準決勝楽しみにしてるよ」

僕は全然楽しくないよ、むしろ怖いよ恐怖でしかないよ準決勝。

雅樹「で生き残ってるのが………げっ！坂本のグループも残ってるのかよ」

明久「マジ！アソコとは当たりたくないなあ」

雅樹「確かに、何考えてるのかわからねえしな」

絶対何か企んでるよ、雄二が企まないわけが無いしね。

雅樹「どっちにしても次は勝つぞ」

確かにそうだね！今残ってるのが2年生だけっていうのが、面白いけど。

-----

所変わって、ドームでは

先生「さて今回の《召還大会》も終盤戦になってきました、それでは文月学園長に今回の戦いの賞品を説明させて貰います」

カヲル「それでは、説明するよ今回の賞品は《学食一年分》+《腕輪》と書いてあったがそれじゃつまらないだろ？」

カヲル「だからね、今回の賞品はコレだ！」

学園長がモニターを指すとそこには、赤黒い腕輪が映し出されていた。

カヲル「コレは《鳳凰》この腕輪は200点で腕輪を使うことができるようにする腕輪だ、まあ使ったら5分後には元の半分の点数になるがね」

今、モニターには色んな場面から撮った腕輪が映し出されている。

カヲル「準優勝は《白銀の腕輪》を上げよ」

そして、モニターは赤黒い腕輪から白く輝く腕輪に変わった。

カヲル「まあ頑張りなクソガキ共」

そして、学園長は舞台から降りた、しかしその顔は少し考え事をしている顔だった。

――――  
明久side

明久「だって雅樹」

雅樹「まあ、俺の目的は腕輪だから関係ない」

どちらにしろ、勝たないとね！準決勝だから相手も変わるのかな？



準準決勝！勝者と敗者（後書き）

カヲル難かしい！！

準決勝！！（前書き）

雅樹と明久の相談室！

明久「質問こないね雅樹」

雅樹「確かに、何か違うことやるか？」

明久「過去は振り返るな！ってだれか言ってたし」

雅樹「何やるか決めるか」

明久「……………皆の好きなもの、嫌いなものを聞いて見るとか」

雅樹「……………俺には分からない、質問して見るか」

それでは、何かやってほしいことがあったらいつてください。

明久「つなぎは任せて！意見くるまでつなげるから」

準決勝！！

明久side

先生「それでは、準決勝を始めますルールはくじ引きでチームを決め4対4で戦って貰います。それでは8人で出てきてください」

先生「それではくじを引いてください」

雄二「赤か」

優子「青だったわよ愛子」

雅樹「明久俺達は、赤だ」

梨華「まあ、青だろうな」

雄二達と同じチームか何かやだなあ。

雄二「よお明久ここは協力しようぜ」

明久「流石に、チーム戦だしね」

そして僕達のチーム戦が始まった。

-----

先生「それでは始めてください」

そつえば何で獅童さんは一人なんだろう？

？「遅れました」

確かこの声は……

唯「どーも 何も言われて無いんでFクラスとAクラスの組を作りました」

明久「なんだって!!」

そんなの有りなの!………待てよ確かにそんなルールは無かったけど、一般常識として。

雅樹「面白そうじゃないか」

先生「それでは、始めてください」

8人「サモンツ!」

教科 世界史

赤チーム吉井明久 403点 坂本雄二 348点

& a m p ;

西園寺雅樹 315点 錦戸赤龍 195点

V S

青チーム木下優子 346点 獅童梨華 98点

& a m p ;

工藤愛子 309点 知将 唯 404点

雄二「何だよその点数は《お嬢様》」

梨華「苦手なの！世界史何て頭がクラクラするの見ただけで」

とにかく嫌いなんだろう、それしか分からないよ、だって日本語おかしいもん。

雄二「とにかく始めるか、明久腕輪封じ」

明久「了解！」

そして僕が腕輪を発動させようとすると。

優子「やらせない」

木下さんが真つ正面から突進してきた！

ヤバイよ……考えるより行動だ！！

そして僕は腕輪を発動した。

雅樹「なんとか間に合ったか」

赤龍「ナイスだ吉井」

何とかギリギリ、腕輪を発動し自分の周りに《暗黒物質》をばらまき、少しのダメージを受けただけで助かった。

明久「ここまでやったよ、では僕達のパフォーマンスを始めましょう！」

そして、僕は能力をフル全開にして白く輝く翼を広げ、知将さんに突進した。

唯「嘘でしょ……400点だったのに手も足もでないなんて」

なんとその一撃で、唯の召還獣の体力謙点数が0になったのだ。

雄二「楽しませてくれよ木下姉」

赤龍「女子は斬らないが召還獣は別だ」

二人も自分自身の敵の元へ走っていった。

雅樹「俺のパワー見せてやる!!」

そして僕達は、一方的な戦いをした我ながら思うよ《流石に手加減すれば良かったのかな》?。

先生「勝者赤チーム!」

なんとなんと僕達は決勝まで駒を進めた!

## 変更点 絶対にお読みください

このたび、この小説についてです。

明久と水泳と幼なじみをかなり内容を変更いたしました。

原因は、出し忘れのキャラクター、最初から付き合っていては面白くないと思ひまして変更しました。

- ・ 変更点・
- ・ 明久と愛子は付き合っていない
- ・ 内容も少し変更されている
- ・ キャラクターの出どころも変わっている

大変面倒ではありますが、最初からお読みになってもらえるとより楽しく見れると思います。

何か分からない所やおかしい点がありましたら。

感想にお書きください、学校時間以外なら早急に直します。

大変申し訳ありませんでした。



決勝は明日！？そして明久の姉と妹（前書き）

明久と雅樹のたわいもない話

明久「そういえば、雅樹ってどっちの腕輪欲しいの？」

雅樹「どっちかっていわれてもな……………貰えるなら両方欲しい」

明久「欲張りすぎだよ」

雅樹「しかし、流石高校！学校にカフェがあるなんて」

明久「そお？アメリカにはあったよ」

雅樹「国が違うからな、あつ！質問あったぞ」

明久「何々……………ブファ！！」

雅樹「どうした！明久、何々……………」

明久よ、還ってこい。

終

決勝は明日！？そして明久の姉と妹

先生「さて《召還大会》も残すところ後一試合になりました」

先生「しかし、残念ながら今日はここまです、明日の午後1時からドームで始まります」

明久「ここまできて、先延ばしするの！」

雅樹「確かにそうだな、さて教室に帰るぞ」

本当だよ！あのクソババは何考えてるのか。

-----

Aクラス

そして僕達は教室に帰っていった途中知ってる顔に会ったがそれは見なかったことにして……。

？「見なかった事にするなあ！！」

明久「そもそも、何でここにいるの？」

？「それは、それは大変大切なことを伝えるためだよ」

入口で僕と僕の妹と話していると、中から愛ちゃんがやってきた。

愛子「あつ！明菜ちゃん久しぶり！でもここまで来るの大変じゃなかった？」

明菜「大丈夫だよ！玲お姉ちゃんと来たから」

…えっ！な、な、なんだってええええ！…あの実の弟である、僕に手を出そうとした、頭がかなりおかしい姉さんが……！

玲「明くん何か変なこと考えませんでした？」

ギヤアアアアア！…！やっぱりいた！そうだコレは幻想だ！あの《不幸なフラグ建築士》を読んで消してくれ……！

明菜「そういえば、格好良かったよ先の大会！何だってけ」「僕達のパフォーマンスを始めましょう」だったけ」

明久「やめてくれ！明菜、お兄ちゃんのライフはもうゼロだよ！」

雅樹「厨二病全開のセリフだな」

もう僕ダウンするよ……

玲「とにかく、優勝したらご褒美をあげますよ」

明久「どうせ《ご褒美のチュウ》をする………嘘でしょまさかの凶星……！」

明久「というか何で皆変な目で見るの！」

翔子「…コメントは控える」

なんて、最悪なんだろ……

決勝は明日！？そして明久の姉と妹（後書き）

明久は何を想像したのでしょうか。

清涼祭2日目 吉井家の朝（前書き）

明久といつくつつかをしりたいという人がおりましたが……まだ  
やりません！

明久は鈍感なので……

## 清涼祭2日目 吉井家の朝

あとのあと僕は、皆の目線が痛かったが普通に仕事をして帰った。

――――  
明久side

吉井家

朝の日差しがカーテンからこぼれて僕の顔に当たっている、しかしまだ眠い…時計を見てみると8時20分を指していたまだ寝れるな、今日学校が休みの土曜日だし…って！

明久「清涼祭だから土日も学校あるんだった！！！」

ヤバイよ！ヤバイよ！……僕は出 哲朗では無いよ。

明久「そんな事考える暇も無いよ！」

明菜「玲姉ちゃんの仕事にいったよご飯は私が用意したから」

明久「ありがと！……って何で明菜が居るの！！」

今日朝からビックリしまくりだよ！

明菜「当分コッチに泊まるっていったったじゃん」

明久「聞いてないよ！あつ！だからダンボールが沢山あるの」

明菜「あと、今日学校の時間9時からだよ」

我ながら思うよ、なんてできた子なんだお兄ちゃんうれしいよ、しかし何で姉さんはあんなにcrazy何だろ。

明菜「ほら食べて、作ったから」

明久「分かった、いただきます」

ん、美味しい流石だよでも……

明久「…朝からカレーはキツいかな」

明菜「気にしない気にしない」

僕としては気になるよ、まあ美味しいからいいけど。

明久「それで、今日も来るの？」

明菜「行くよ！後夜ご飯何がいい？」

明久「ん……………僕が作るのか？パエリアとかなんだろ、ピラフとか？」

明菜「じゃあ、パエリア作って！私材料買っから」

再度思うよこんなに出来た妹をもつと誇らしいよ、出来た妹は最高だな。

そう再認識しているとインターホンがなった。



ピンポン

明菜「はいはい、今出ますよぉ」

こんな朝早くから誰だろ？

愛子「おはつよぉ 明菜ちゃん！そろそろ学校の時間だから」

明久「今から準備するから待ってて！」

-----

準備完了！

明久「よし準備完了行きますか」

明菜「いつてらっしゃい！」

明久「行つてきまーす」

そして僕は家を出て学校に向かった。

清涼祭2日目 吉井家の朝（後書き）

感想マッテまーす！

## 吉井家！ 人物紹介と腕輪

吉井明菜 ヨシイアキナ

小学6年生

3 s i z e    B 6 9    w 4 8    H 6 5

h i g h 1 5 1

### 特徴

容姿はけいおん！の平沢憂

料理、掃除などほぼ全てが出来た完璧な女の子、明久いわく「なんて出来た子なんだ」という程完璧だが、極度のブラコンである。

若干天然が混ざっており朝からカレーを出すなどの行動をする。

趣味 明久の世話

吉井玲 ヨシイアキラ

全て原作だが、アメリカには留学していない。

知能は原作通りで爆弾発言もするし、実の弟明久に手を出そうとする。

腕輪

白銀の腕輪

召還獣ではなく生徒がつける腕輪

同時召還型

原作といっしょ

点数での暴走無いが、普段の2倍の集中力を使うそのため、操作が非常に難しい。

武器進化型

点数関係なく武器の攻撃力を2倍になるがダメージは2倍受ける。

清涼祭2日目 午後まで暇ぁ〜（前書き）

明久に5の質問！

明久「こゝ、此処はどこ！」

此処は君の夢の中だコレから質問するから真実を答えてくれ

明久「分かったよ」

理解がはやくて助かるよ

1 アナタの好きな食べ物？

明久「僕の勿論パエリアだけど」

2 アナタの好きな人は？

明久「今は…家族かな」

3 好きなゲームは？

明久「モダン3だね」

4 今一番したいことは？

明久「ゲームだよ！」

5 質問に答えてくれてありがとうまた会おう

明久「またね」

清涼祭2日目 午後まで暇あゝ

明久side

ん、ん……いままで寝てたんだ、僕は控え室で回転するイスに座っているそして今……

明久「ひ、ひ、暇だああああ!!」

雅樹「仕事しろおおお!!」

怒鳴るなよ!鼓膜破れるかと思っただろ!

愛子「そうだよ、雅樹のいうとおり僕達ばかり動いてアッキーも執事の服着て注文取って」

現在、お菓子の材料をモブ達が買い出し中……分かるでしょ材料がないの。

なので厨房メンバーは誰も動けない訳だから、休憩の時間だね。

翔子「…吉井手伝わなければ……メイド服着せる」

翔香「それども…看護婦?」

何だろ霧島姉妹が怖い事いつてるや何だろ身体が震えてきた。

明久「僕でよければ手伝います…いえ手伝わせください」

翔子「…だったら着替えてきて」

そして僕は男子様更衣室に向かったがある異変に築いた。

明久「霧島さん！何で袖が無いの！」

翔子「…何となく」

翔香「嫌なら……やっぱり着て」

何を考えてたんだろ…でも一つ分かるよ…ろくでもない事だろうね。

-----

試着終了！

明久「意外抵抗ないね逆に動きやすいよ」

愛子「似合ってるじゃんアッキー」

翔子「…爽やか」

翔香「何か…スポーツマンみたい」

皆いろいろなこと言っているが大きくまとめると。

愛子 翔子 翔香「（か、格好いい／＼さすが未来の旦那）」



雅樹「明久……モテる方法を教えてくれ！頼む！産まれてこの方《非リア充》なんてヤダ！俺にも青春をさせてくれ！」

明久「何言ってるの、僕がモテる訳無いじゃんだったら僕も一回も《付き合った》ことないよ」

雅樹 side

何だってエ……何だハーレムは彼女をつくるまでも無いって事か。

明久「何で拳に力が入ってるの！落ち着いて」

雅樹「ふう……よし！」

俺何に力入れてんだ…バカみたいだ。

明久「で、注文取りに行くよ」

雅樹「なんだかんだ言ってお前がやる気だしたならいいか」

疲労がハンパないな今日は家帰った速攻寝よ。

## 決勝忘れてた！？（前書き）

明久と雅樹の質問コーナー！

明久「久しぶりだね皆！質問きたから始めるよ！」

雅樹「始めてくれ」

明久「貴方が人として一番大切だと思うことは何ですか？だって」

雅樹「それはアレだろ、ノリかテンションだろ」

明久「僕はね……優しさかな」

雅樹「そう、考えるとたくさんあるな笑顔とかさ」

明久「そうだね結果！優しさかな」

雅樹「俺の意見はどこにいった！」

終

本編へ

決勝忘れてた！？

雅樹 side

明久「ご注文何いたしますかお嬢様」

「え、えーと／＼執事特製レモンティーで」

明久「かしこまりましたお嬢様少々お待ちを」ウインク

「すみません」

明久「はいどうしましたかお嬢様」

「コレを」

明久「了解しましたお嬢様ビスコッティを一つで」ヤサシイホホエミ

「は、はい／＼」

フラグってあーやって作るんだな、まあ見てもやり方なんか分からんしやる気もないけどテンションも上がらないし。

雅樹「ご注文何いたしますかお嬢様」

「じゃあコレで」

雅樹「かしこまりましたお嬢様少々お待ちを」

そう言ってやってんのに、何でもおこらねんだ！明久だからか？  
顔か？髪か？

明久「ねーね結構コレ疲れるね」

雅樹「そうか？俺は何ともないが」

明久「体力あるんだね雅樹は」

その点、体力あるとらくだがな

翔子「…二人とも行かなくていいの？」

雅樹「何だ？」

明久「僕達何かあった？」

翔子「…決勝」

…自分でも分かるぜ、今顔真っ青だなあつ明久も青くなってるって  
青くなりすぎだろ！！

明久「…時間は…まだある！行くよ雅樹」

雅樹「お、おう」

そして俺たちは走ってドームに向かった。

-----

雄二 side

ドーム内

雄二「（何やってんだ明久達は）」

赤龍「こんな勝ち方納得いかねえな」

先生「何とここまできた、吉井・西園寺ペアはやってこないどうゆうことでしょ」

本当だ、何やってんだアイツは！

？「…遅れ…ま…した」ハアハア

？「いやゝ疲れたわ」

そこには、本当に疲れてる男と息一つあげず笑ってる男が立っていた。

雄二「やつときたか明久雅樹」

そして二人は目を合わせると指を雄二達に向けてこう言い張った。

明久 雅樹「最初にいっておく、俺達はかなり強い！！」

決勝忘れてた！？（後書き）

此処で二回に分けました！続きは6時に投稿します

朝のね

決勝開始！！ 本気のぶつかり合い！（前書き）

明久と雅樹のコレからの予定！

明久「そろそろオリジナル小説始めないのかな」

雅樹「期待はしないほうがいい」

明久「分からないよ？やるかも……やらないかも」

雅樹「まあやるとしたら、何だろどっか遊びに行きたいな」

明久「同意見だよ！」

何と二人の意見が一致さあどーなる！

決勝開始！！ 本気のぶつかり合い！

明久side

雄二「俺達も負けられねえよ！」

赤龍「此処まで負けたらダサいからな…めんどうだが本気でいく」  
ギロリ

あの子目つき一氣に変わったよ何かのモードに入っただけに。

先生「それでは、科目は総合科目で始めください」

4人「サモンツ！」

総合科目

2年A組 吉井明久 4643点

& a m p ; 西園寺雅樹 4115点

V S

2年F組 坂本雄二 3986点

& a m p ; 錦戸赤龍 1859点

雅樹「さすが《神童》と昔いわれただけあるなまさか1日で此処まであげるなんて」

雄二「いやいや、4000点言っただけで無い時点でまだまだ、しかし勝ち譲らないがな」



明久「知ってる？4400点以上は腕輪がつかえるんだよ」

雄二「俺は明久を引きつけるお前は雅樹を」

赤龍「最悪だ……学年次席レベルがいるなんて」

明久だけで充分だなはあ暇になりそうだ。

赤龍「暇にはさせないよ！」

そして戦闘が始まった。

明久side

明久「雄二どんな殺しかたしてあげようか？」

雄二「悪いけどおことわりだあ！」

現在僕は、白い翼を6本生やして飛んでいが翼が一枚1000点消費するのがデカいね。

雄二「降りてこいよ明久」

明久「ヤダねうらっ！」

明久の召還獣の背中から白い球体が雄二に向かって飛んでいったが。

雄二「甘いな！明久こんなことも頑張ればできるんだぜ」

雄二の召還獣は身をかめると右手を腰にあて左手を前に出して一  
気に両手を上に突き上げた！

バフーン！！！！

明久「なっ！」

何と明久の放った白い球体は雄二によって跳ね返らせられてこちら  
に飛んできた。

明久「ガード……一応僕が放った技何だから」

雄二「残念だ」

明久「点数があるこんな事もできるんだよ！」

そして僕の背中からはさっきの2倍合計12枚の翼が生えた。

**決勝開始！！ 本気のぶつかり合い！（後書き）**

二回に分けて申し訳ないです（＜|＞）

0話 明久と工藤とアメリカ！（前書き）

30000PV記念にアメリカでの話

キャラクター

冬島 澪      フユジマミオ

久世 夕紀華      クセユキカ

古川 和輝      フルカワカズキ

下川 真北      シモカワマキタ

明久の通ってたアメリカスイミングスクールの最後までいた仲間。

## 0話 明久と工藤とアメリカ！

コーチ「S1を100m8本始めて」

明久「和輝大丈夫？」

和輝「一応な今日も5kmも泳いでるぞ」

「

真北「取り合えず始めるぞアイツはやらねえとうるせーからな」

僕は今、アメリカにある州立のプールで泳いでる。

しかし自分でもタイムが速くなったのは分かるが、コーチが厳しいためどんどん辞退していく人もいた。

和輝「人数も男子3人って少なすぎだもんな」

明久「じゃあ行くか」

――――――――――

更衣室

明久「やっと練習終わった！」

和輝「いやゝ疲れたわ今日宿泊施設に帰ってさっさとゲームやるか」

真北「俺もやるかなあ暇だし」

この後僕もゲームやろうかな。

明久がそんな事考えていると男子更衣室の扉が開きそこから……

明久「愛ちゃん！！何で入ってきてるの！全員着替え終わってからよかったけど」

愛子「早く準備してよ皆！今日遊びに行くんでしょ」

しまった…忘れてた……皆も忘れてたみたいだしっか。

夕紀華「忘れたいわないよねアッキー、カッキー……マッキー？」

真北「何で俺だけはてながついてるだよ」

夕紀華「マッキーってなんか普通すぎて」

澪「早くいこ…時間がもつたいない」

明久「…さあ行こうマッキー」フフフ

真北「笑いながらいうな」

だってねマッキーって何かツボにハマって…ハッハハ今度からマッキーって読んであげよ。

そしてぼくたちは外に出て行く場所決めるために近くのファストフードお店に向かった。

明久「ねーね結局どこに行くの」

真北「この近くはほとんど全部いったからな」

明久「そうだねマッキー」

和輝「少し違う場所行ってみるか？」

ここから、歩いていけて…なおかつ行ったことない場所……分らないや。

真北「思いつかねえなあ……あつ！プールいかねえ？」

愛子「泳いだばっかじゃん」アイコチョップ！

真北「いって！何すんだよ愛子！」

夕紀華「マッキーが馬鹿な事いつてるからだよ」

真北「誰がb a……確かに点数は悪いけどさ」

本当にバカだねマッキーはそうゆうことの馬鹿って意味じゃないのに、まっ言葉には出さないけど。

漣「でも後、一週間で合宿終わりだよ…何か思い出作ろうよ」

他の皆「」「」「そうだっけ！完全に忘れてた！！」「」「」

明久「だったらやっぱりあの公園行こうよ」

真北「だな、最初に皆が集まった場所」

――――

あれから一週間

空港

明久「皆、まだ会おうね！」

真北「あー会おうぜここはカッコ良く行くぞ和輝」

和輝「では、いつか」

夕紀華「そうだね、バイバーイ！……行くぞ」

澪「またあいましょう皆さんそれでは」

そしておのおの皆違う場所に帰っていくなか僕と愛ちゃんも……

愛子「行こっかアツキー」

明久「僕達に涙何か似合わないよ」



愛子「そっだね行こう！」

そして僕達は日本の学校《文月学園》に向かった。

0話 明久と工藤とアメリカ！（後書き）

過去編ですね。

この第2の主人公が物語が……………

人物紹介2を新しくしました見てください！

明久の一撃！ 神秘的翼（前書き）

明久「ねーね何で作者はこの回をためておいたの？」

作者「それはね……………明久は美味しい物は最後に取っておくだろ」

雅樹「なる程、他のやつは前菜でコレがメインディッシュってわけか」

作者「そうそう！正解…多分」

明久「何か締まりがないな」

作者「気にしない！それでは本編えええ」

明久 雅樹「どうぞ！！！」

## 明久の一撃！ 神秘的な翼

明久「点数の消費は激しいな」

明久は自分の召還獣を見ながら呟いた。

雄二「チートだろ本当に……」

明久「そうだよ僕の腕輪は自分でも思っ、《チート》だってね」

その言葉の後明久は雄二に12枚数の翼を槍のようにして、突き刺そうとしたが。

赤龍「うあああ!!」

横からすっ飛ばされてきた赤龍の召還獣がぶつかり、翼を回避したのだ。

雅樹「悪い明久…少し好奇心がわいてぶつけて見て」

明久「どんな好奇心？」

雅樹「召還獣と召還獣をぶつけたら点数が減るのか……あっ！味方どうしでね。」

なるほどそれなら僕も気になるな……結果はどうだったんだろ。

雅樹「結果はモニターを見る」ニヤリ

雅樹がとても面白いものを見ているかのように笑っているため、検討はつくが。

## 総合科目

2年A組 吉井明久 2843点

& a m p ; 西園寺雅樹 2480点

V S

2年F組 坂本雄二 1536点

& a m p ; 錦戸赤龍 35点

明久「点数が減ってるね……雅樹も」

雅樹「アイツと戦うのは二回目だがあの時より何か速くなってな」

明久「甘くみてたらダメージくらった」

雅樹「……ノーコメントでいかせてもらう」

そして僕はフィールドずっと見ていたはずなのにあることに気づいた。

明久「雄二達がない」

雄二「ご名答！正解者に敗北というなのプレゼントを！」

雄二の召還獣は明久の召還獣の真上にいち、そして重力の影響でかなりの速度を出して、落ちてきた。

明久「甘いね僕の《暗黒物質》に「弱点はどんな物にだってある！」そんな事無い！」

雄二「甘いのはそつちだあああ！」

そして雄二の召還獣はナツクルを外し明久の召還獣に投げつけた。

明久「しまった！」

雅樹「何やってんだよ明久！」

ナツクルは僕の召還獣の頭に当たりしかも何故か気絶している。

雅樹「待ってる明久今いく「行かせない」邪魔だ」

赤龍「なあっ！……なんてね」

雅樹「俺のやり方には反するが終わらせる」

雅樹の召還獣はまるで腕輪を使ってるかのように速く動き赤龍の召還獣にラリーアットをくらわせた。

赤龍「しまった！」

明久「ヤバイよ……かなりクラチャッタ」

雅樹「クソ明久二人同時に出発するぞ……っ！おい！話聞いてたか！」

明久「武器が無いんだ、翼を使って一撃でしとめる」

雄二「はあ！大きくでたな明久！そこなくちゃ」

僕は狙いを定めて雄二の召還獣の脳天を狙って撃った。

雄二「クソあの翼邪魔だ！」

明久「よけたか、雅樹翼をしまつて連携プレーだ」

雅樹「オレさつきそれ言つたからな」

そして明久は翼をしまい腰についている、剣を抜いた。

雄二「翼をしまつていいのか」

明久「大丈夫だよこの勝負勝たないと行けないんでね」

雅樹「まあそういう訳だ……死ねえ！雄二！」

雄二「2対1とはなまあいいが」

暗殺剣を片手に雄二の元に走って向かったが何故か雄二の召還獣は腕を組んだまま動こうとしない。

雅樹「動かなくていいのか？」

雄二「動くさ……いずれな」

そして僕が首もとを剣で斬ろうとした瞬間雄二の召還獣は身をひねり出して攻撃をよけた。

明久「うわあ！雄二がこんな事するなんて思わなかった」

雄二「何だいつも大胆とか言いたいのか？」

雅樹「嫌そうだろ！」

雅樹も雄二の召還獣を投げようとしたがよけられてしまっていた。

明久「（拉致があかないよ、だったらここは一発逆転の必殺技！）」

明久の召還獣の背中からは2本の翼が生えたが、それは形を変え光の剣になった。

雅樹「な、なんか凄いな見た目が」

明久「見た目だけじゃない！」

またしても雄二の元に向かっていたが、身をひねり出してよけられてしまったように見えたが。

明久「僕に常識は通用氏ねえ！」

総合科目



2年A組 吉井明久 650点

& a m p ; 西園寺雅樹 85点

V S

2年F組 坂本雄二 0点

& a m p ; 錦戸赤龍 0点

先生「勝者2年A組！」

明久「やった！勝った！」

雅樹「よっしゃ！」

こうして僕達は、《召還大会》で優勝をおさめることができた。

## 偶然と偶然の重なり

とある日

清涼祭が終わり、お店などの片付けも終わりそして何と3連休ができてしまった。

そして久しぶりに僕はベッドの上でゴロゴロしていた、休みつて最高だなあ。

明久「ふふ……やっぱり家が落ち着くな」

明菜「そうだね落ち着くね…さてとご飯作りますか」

明久「そうだね明菜……って何で明菜がここにいるの！……！」

ま、まさか…夜からここにいたのいやそれは無い……多分。

明菜「大丈夫だよ明兄きたのはついさっきだから」

明久「ビックリしたあ……そういえば朝ご飯何？」

明菜「そう家ばさっき坂本さんから電話がきてたよ」

マジで何か約束してたっけ？んゝ覚えて無いなあ。

明菜「何か遊ばないかだって行ってくれば明兄、家の事は私がやっておくから」

明久「ごめんね明菜、じゃあお兄ちゃんいつてくるは」

明菜「ご飯食べてからね」

明久「了解」

朝ご飯を食べて、歯磨き、顔洗った、着替えた……用意完了！

明菜「明兄！8時までには帰って来てね伸びるんだったらメールした後「分かってるよご飯食べないならメール」……じゃあいつてらっしゃい！」

明久「行つてきまーす」

皆の待ち合わせ場所に僕は走って向かって行つた。

――――

待ち合わせ場所！

雄二「なあ秀吉」

秀吉「なんじゃ雄二何か気になることでもあるかのお」

雄二「何でこんなに人数が多いんだ？」

ざっと見ただけで10人近くその場所にいた。

康太「……リア充は滅びればいい」

愛子「まさかね〜こんな場所で会うなんて」

優子「本当朝から秀吉が出掛けたから私も出掛けたら皆に会うなんて思わなかったわ」

雅樹「気にするなそれより明久はどうした？」

竜也「だな、しかし偶然すぎだろこのメンツが集まるなんて」

その言葉通りここにいるメンバーは本当に偶然にやって集めれた。

メンバー

雄二 秀吉 康太 愛子 優子 雅樹 竜也

翔子 翔香 唯

後に

明久

出発！って何でこんなにいるの！！

現在僕は絶賛遅刻中だ、何故かそれは別の話で。

雄二「遅いな…明久…おっ！きたか」

明久「ごめーん！！遅れたあ！」

秀吉「やつときたかのお明久」

皆待っててくれてよかった……。

明久「何でこんなにいるの！」

雄二「気にしたら負けだ明久」

確かにそうかもこんなに集まるとは…偶然いや奇跡とでもいうのかな。

愛子「それより行こうよ」

雅樹「悪いな俺と竜也は用がアルから抜けるわ」

竜也「マジで！遊んで帰ろうぜ」

雅樹「ダメだ帰るぞ」

竜也「何でここに止まってたんだよ！」

雅樹「通りすがっただけだ…じゃあな皆」

竜也が引きずられてる……抵抗してる…ハラパンされて気絶したね。

雄二「……行くか」

明久「……うん」

――――

ゲームセンター！

雄二「やっぱり最初はここだな」

唯「そうだね、遊ぶとしたらここだよね」

優子「でも何か定番すぎない」

そんな事言っちゃいけないよ、女子達が行く場所行く場所に文句つけてたんじゃん。

翔子「…ゲームセンター久しぶり」

翔香「そうだね…小学校…いらいだよ」

愛子「いやあ…僕も久しぶりに来たなあ何週間前だったけ」

明久「さてと何から始めようかな」

ゲームの機種と台数はここが一番多いからね迷っちゃうよ。

秀吉「それでは明久よ音ゲーをやらんか？」

明久「フッフ…僕に勝てるとでも秀吉」

そして僕達は音ゲーの沢山ある場所に移動した。

唯「じゃあ私達そこらへんで遊んでいるよ」

愛子「そうだね行こっか」

雄二「ムツツリー二俺達はどつする？」

康太「…明久達を見に行く」

-----

音ゲーゾーン！

明久「このギターを使ったやつで勝負だよ秀吉！」

秀吉「明久ワシを甘く見るで無いぞ」

試合開始！

大丈夫、このゲームは何百もやったことがあるから攻略できる。

秀吉「（ワシもコレくらいできるのじゃー！）」

試合終了！

秀吉「ざ、惨敗じゃ」

明久「僕に戦いを挑む事じたいがダメだったんだよ秀吉」

雄二「やるんなら秀吉、格闘ゲームだろ」

明久「なら雄二勝負する？」

雄二「望むところだ明久行くぞ！」

僕達は格闘ゲームのある場所に睨み合いながら向かって行った。



## フレイム&amp;プリザード（前書き）

明久の独り言

明久「何か最近疲れてきたんだよね」

明久「何故か？分からないよ自分でも腰とか……ね」

明久「ん？何？独り言言ってるってハゲる？……うるさいな別にいいじゃないか、僕だって独り言うつ時もあるの」

本編へ

## フレイム&amp;プリザード

明久「う、嘘でしょ……」

雄二「単純な攻撃ばかりなんだよ明久」

明久「くぅ……ハア今回は僕の負けだ」

何故こうなったかは少し時間を戻そう。

-----

15分前

明久「雄二が僕に勝てるの？」

雄二「当たり前だろ、お前ぐらいすぐに倒せるわ」

僕に挑んだ事を後悔させてあげるよ。簡単にいうとボコボコにしてやる。

雄二「明久……後悔するなよ」

明久「ゲームの神の力見せてやる」

今回僕がやるのは、《フレイム&amp;プリザード》3次元空間で能力を使用して戦うバトルだ。

雄二「まずこのゴーグルをつけて」

明久「グローブもつけて」

明久 雄二「それじゃあ始めるか！」

このバトルはどれだけ能力を効率よく使うかだ、まず手に炎を作っておいて雄二を見つけた瞬間発射する。

雄二「明久最初にいうがこの勝負俺がいただいた！」

明久「ん？……うわっ！やられた何で場所が分かったの！」

雄二「気にするな」

クソ次は負けないぞ。

最初に氷の分身を作っておいて……うわっ！

雄二「おいおいどうした明久」

明久「くうゝまだまだ！」

こーなつた考えがえず行動だ！

明久「どこだ……くうゝ見つからない！」

炎で自分の身体をコーティングして剣を作って……ぎゃあああああ  
！！

明久「う、嘘でしょ……」

雄二「単純な攻撃ばっかなんだよ明久」

明久「くう……ハア今回は僕の負けだ」

雄二「久しぶりに勝ったぜ」

明久「スッゴい悔しい！」

何と負けてしまった……ゲームだからこそ悔しい！

フレイム&amp;mp・ブリザード（後書き）

短い！！

ゲームはルールを知らなくともできるんだよ！（前書き）

タイトル長いな〜あっ！どーもバカと不幸です。

いやいや独り言をしゃべってるうちに始まるとは思ってもよらず。

世界とは違う空間

さてさて、少しこれからについて調整役<sup>バランス</sup>に聞いてみましょう…まあ正確にいうとこの話の全てを知っている人間です。

？「おいおい俺をこんな所に呼んでいいのか？」

気にするな、それよりそろそろこの話を進めようじゃないか。

？「いいぜ別に俺の出番が速まるんだろ」

確かに、この空間から速く出ていけそして話をシナリオどおり進めろ……真北。

真北「了解した」

本編へ！

ゲームはルールを知らなくともできるんだよ！

愛子 side

唯「愛ちゃん、何やる？」

愛子「ん、意外とやりたいもの見つからないね、優子達は何かない？」

さすがにここでシューティングゲームっていうのは不味いからね、何か女子がシューティングゲームって恥ずかしいし……周りの視線が痛いし。

翔香「だったら……KILLER POINTAやらない？」

愛子「へっ？……それってアレだよね」

翔子「……翔香、優子とかいるんだからそれは家でやればいい」

どうゆうこと？家でやればいい？……想像はついたけどコレだけはいえる……。

愛子「さすが霧島家」

優子「ねー愛子KILLER POINTAって何？」

愛子「機械はアレで拳銃を持ってビルの中に潜入して敵を倒していくゲームだよ」

唯「それ私も知ってる！ボスがゾンビの奴でしょ！」

翔香「爽快感が…たまらない」

そして僕達はKILLER POINT Aの機械のもとに向かって行った。

-----

優子 side

聞いたこともやった事もないゲームのもとに私は向かってる…実際にゲームセンターなんてあまりこないし。

愛子「優子？何か考え事してた…行くよ！」

翔香「チームは…どうする？」

優子「ジャンケンで決めましょ」

皆「最初はグージャンケンポイ！」

結果は

愛子 優子

翔香 唯



翔子

愛子「よろしくね優子」「ニコリ

ヤバいここで負けたら恥ずかしいし！

優子「行きましょ愛子」

-----

結果！

愛子「……………何でそんなに上手いの優子」

優子「わ、分からない…よ何か撃ってたら当たってね」

何と私と愛子のペアーでこのゲームをやって出てきたキャラが気持ち悪すぎたから……………そして後は覚えてない。

愛子「すごかったよ優子、目つぶってたけどね」

優子「それは言わないでよ愛子」

得点は……………18239点らしい愛子がいつに「こんな得点見たこと無いよ…あっ！ランキング1位らしい。

唯「じゃあ私達行ってくるね」

翔香「行こうか…唯」

-----

結果だよーん！

唯「まあまあだったかな」

翔子「…いいほっじゃん翔香」

翔香「愛子と優子が…とりすぎだよ」

翔子「…私のばんだねよく見ててね」

そして翔子は銃を持って画面を見たその目つきは狩人そっくりだった。

ゲームはルールを知らなくともできるんだよ！（後書き）

話が急速に変わる！？

あの仲間達登場！？（前書き）

明久「そういえば、11月22日って作者の誕生日だよね」

投稿されるのは23日だけだね。

雅樹「今日は確か、いい夫婦のグヘエ！何すんだよ！」

そこにふれてはいけないぞ、雅樹

明久「そうだよね、バカ不さんは非リア充だもんね」

う、うるさーい！！

明久「まあ僕も人のことはいえないけどね」

黙れ！リア充！FFF団呼ぶぞ！

雅樹「それより本編いこうぜ」

本編へ（T—T）

あの仲間達登場！？

愛子 side

今僕はとても凄い物を目にしているそれは……

優子「過去最高記録って……どういうこと？」

愛子「まさかね、翔子ちゃんがこんなにはできるとは思わなかったよ」

翔子「…翔子ちゃんって呼ばないで」

僕達がたわいもない話をしていると、男の人がこちらに向かって話かけてきた。

？「いやいや、君たちコレから暇？僕達と遊ばない？」

？「おー可愛い子いるじゃんなあーマッ………」

マッ？どういうこと？………待つてこの声どこかで聞いたことある。

？「バレたなオイ、和樹いつも冷静なお前がな」

？「すまない、真北」

まさか！あのいつも冷静沈着の和樹君とバカなマッキー？

和樹「久しぶりだな愛子、夕紀華と澪はまだきてねえよ」

真北「あの二人なんか知らないけど服買いにいったぜ」

漣「もう買い終わった」

夕紀華「久しぶりに皆にあいにきたよ……あれ？私の愛しのアッキーは？」

え？愛しのアッキー？…………アッキーに何をしたの！！

真北「何が愛しのアッキーだ、バカか？お前は」

夕紀華「バカにバカって言われても説得力ねえし！」

真北「宇宙人の言葉何か分からねえ」

夕紀華「ヴァカー！！人間の言葉も分からない…異星人にいわれたくないね」

何だろ……前より仲が悪くなってるかな。

和樹「愛子氣にするな仲が悪いのは前々から知ってるだろ」

愛子「確かにそうだけど」

唯「あ、あの二人ケンカしたままでいいの？」

優子「私も思う」

愛子「気にしないでいいよ」

多分おさまると思うから……ね。

明久「何やってんのあ……マツキー！？に和樹？」

真北「誰がマツキーだ！！」

和樹「久しぶりだね明久」

夕紀華「ほらアツキーにもマツキーだってハッハハハッハハ」

真北「笑ってんじゃねよ！」

あの仲間達登場！？（後書き）

真北「何かあまり活躍の場が無かったな」

気にするな真北、それよりあの計画はすすみそうか？

真北「焦るな…多分できると思うぜ」

この小説はいつまで持つか分からない、そのための予備としてお前を呼んだ

真北「後は任せろ」

分かった任せろ



《必読！》必ずお読みください 今後のことが書いてあります

どーもバカと不幸です。

最初にいいます……小説を止める事はありません。

ここで質問です、今このまま《バカとテストと召還獣》の二次を続けるかそれとも他の《アニメ》を持ち込むかを考えています。

そこです。

どの話を持ち込んで欲しいかそれとも持ち込まないかを……決めてもらいたいんです！

身勝手ですがすみません。

1 未来日記

2 とあるシリーズ

3 緋弾のARIA

4 そのまま

5 しらねえよ！

この中から選んで番号で答えてください！

少しだけ紹介！

## 未来日記

天野雪輝は日記が趣味の中学生。彼は自分の知らぬ間に「未来の出来事が書かれた日記」を巡る、殺人ゲームに巻き込まれてしまう。

とある

超能力者達が沢山住む、学園都市で起こされるストーリー。

## 緋弾のARIA

……説明しづらいので調べてください。

それではお願いします。

それでは。

## ケンカと日記！（前書き）

決定しました！

1が二票

2と3が一票づつ

そして4が二票でした。

そのたもろもろ、友達に聞いた所……1がいいのではということ……  
……よって1で頑張らせていただきます！

メゲない諦めないをもっとにやりますのでよろしく願います！

## ケンカと日記！

真北「そういえば忘れていたが《デウス》他の《日記》所有者も決まったか？」

悪いがまだきまって無い、そちらで決め手くれても構わないが

真北「いやいやそれは遠慮しておくよそれではつまらねえ」

お前の知り合いになるかもしれんが構わないか？

真北「構わねえよ、俺はどちらでもいい」

では、次は全員揃った時會おう

真北「じゃあな」

ムルムル side

大聖堂

ムルムル「確定の人はきまっておるがその他の人はどうするのじゃ？」

デウス「気にするな、お前ごときじゃあ分らない」

何じゃデウスの奴隷だって意外とわかるんじゃぞ！

デウス「それではこのメンツでいいな」

ムルムル「ほー他の奴も、今選んだのかまあどちらにしても《デウスお前自身の体は持つのか》？」

デウス「だから速く始めるのだ」

掴めん奴じゃのおゝしかし……「ヤツは日記をつまく使えるのか……」  
《吉井明久》。

――――  
明久side

ゲームセンター！

真北「すまんおくれた！」

夕紀華「あれ？まだいたの？帰ったのかと思った」

真北「怖じ氣ついて帰ろうとしたのはお前だろゝなあ《ユッキー》」

あれ？なんか夕紀華の身体から赤黒いオーラが出てるんだけど……  
つて！皆逃げるの早！

夕紀華「今日という今日は許さない！」

真北「お前は神か？別に許して貰わなくて結構だ」

明久「まあまあ二人ともケンカはそれぐらいにしようよ」

二人「明久は口をだすな（出さないで）！」  
アッキー

明久「ひい！……ごめん」

何で僕が怒られたんだろ……止めに入っただけなのにしかし二人からのオーラを感じているのか、二人の周り誰もよらないね。

愛子「ほおっておこアッキーほら皆いなくなっちゃったから」

明久「そ、そうだね流石にこの場面じゃ」

退散が一番でしょ！

-----

クレープ屋！

明久「うん、やっぱりこの《バナナイチゴスペシャル》が一番だね」

雄二「分かってないなあ」明久はこの《アップルシナモン》こそ一番美味しい」

秀吉「好みは人それぞれじゃ」

康太「…確かに」

それを言ったらおしまいだよ、秀吉にムツツリーニ。

明久「それにしてもあの二人遅おつと！電話だ…真北からだ」

明久「もしもし、どうしたの？」

真北「おいおい明久お前らどこに行ったんだよ」

明久「クレープ屋だけど」

真北「まじかよ…まあ「アッキー達どこにいるのか分かった？」うるせえな今分かったから行くんだよ」

まだケンカしてるよ…何でケンカばかりしてるんだ…あれ？

明久「何で僕日記何て書いてったけ？」

愛子「どうかしたのアッキー？」

明久「い、いや何でもないよ」

何だろバレちゃいけないいきがする……。

雄二「メール？…誰からだ……っ！……よくわからんが……」

ん、どうしたんだろ？雄二？まあいつか。

## ケンカと日記！（後書き）

皆さん感想ありがとうございます！

意見くださった方本当に感謝しております。

それでは引き続き見てください、それでは！



集合メール？…まあ掃除しよ

明久side

あの僕は、もう一つゲームセンターを回って皆と別れて家に向かう途中の道にいた。

明久「（メモ帳の所にあつたあれは何なんだろ）」

昔書いてた、《無差別日記》が更新されていた……一番びっくりなのが《未来》の事が書いてあることかな。

明久「どちらにせよ、早く家帰ろ」

-----

吉井家！

明久「ただいま」

明菜「おかえり明兄」

おっ！まさか姉さんは居ないのか。

明菜「明兄、玲姉さんは家の掃除私としてるよ」

明久「あ、あの姉さんが掃除……まず最初に掃除できたの？」

玲「明くんその言い方から見ると……姉さんは掃除ができないとい  
ってるんですね」

うん、そうだよ僕は姉さんが掃除できないと何のタメライもなく言  
ったよ、だって……ねえ。

玲「失礼な事考えている」「心の底からすみません」……」

明菜「さ、さあ明兄も帰ってきたんだから大掃除するぞお！」

一応掃除はしてるつもり何だけどな。

-----

リビング！

明菜「さて、今回の掃除ですが……各自の部屋以外は全て片づけま  
した……ということ、あみだくじで場所を決めます」

ということでの意味が分からないよ……

明久「（そういえば、未来の事が書いてあるなら……）」

そして僕は携帯を開いて、中を見た。

明菜「どうしたの？メール？」

明久「メールかと思ったら違ったみたい」

コレで確認はした、一番右側が僕の部屋だ！！

明久「僕一番右側ね」

明菜「私真ん中！」

玲「それでは見てみましょう」

結果！

明久 自分の部屋

明菜 玲の部屋

玲 明菜の部屋

明久「（当たったてる……しかし何で書いてあるんだろ……ん？メールだ」

明菜「それでは掃除スタート！」

-----

明久の部屋！！

明久「誰だろこのメール？まあいいや開けてみよ」

内容

吉井明久様、今夜の12時は必ず家にいてください。

未来日記の説明をいたします。

集合場所　大聖堂

案内人　ムルムル

それではお待ちしております。

何コレいたずらメール？はあゝ未来日記って何だよ。

明久「いいや掃除しよ」

まずは……机の上からだね。

教科書の山を下に下ろして、いる物といない物に分けると。

明久「プリントが沢山入ってるなあゝ」

明菜「明兄、手伝おうか？」

明久「あれ？明菜は掃除終わったの？」

明菜「終わったよ、元々余り汚れて無いしね」

それは僕にたいする嫌みか何か？確かに汚いよ！それでも頑張ってるの！

明菜「まあ頑張ってるね夜は鍋だから」

明久「分かったよ」

-----

1時間後

明久「ぜ、全然綺麗にならない……」

な、何で！掃除するたびに汚れていくよ……。

明久「必殺技！《放置》「だめですよ明くん」……だよね」

玲「明くん掃除を手伝いましょうか？」

明久「……オネガイシマス」

玲「よろしい、それでは始めましょう」

姉さんに手伝ってもらってからというと、僕の掃除かたとほぼいっしょなのに、片付きかたが違った。

明久「す、すごい何でこんなに片づくの？」

玲「コレが普通何ですよ明くん」

明久「しかし綺麗になったな」

明菜「二人ともご飯だよ！」

ふうーやっにご飯だ、今日は鍋だよねさあ早く食べよ！

――――

リビング

三人「いただきます！」

明久「まずは肉からだよね」

明菜「早く食べてみて」

ん？何でこっち見てんだろ？まあいつか。

明久「……っ！美味しい！」

明菜「やっぱり！やっぱり！……気づいて！」

明久「タレを自分で作ったでしょ」

明菜「正確だよ明兄！」

しかし、流石だなかなり美味しい！

玲「家にも一人で料理が上手い人がいると助かりますね」

明久「本当だね、明菜はいい《お嫁さん》になるよ」

明菜「そ、そんな明兄ダメだよ…兄妹ででなんて」

へ、変なこと考えてるよね、絶対に明菜の暴走…とでも呼ぼうか。

明菜「沢山食べてね」

――――

深夜

？「起…のじゃ…久よ」

誰だ？うん僕の視界に…小さい人間…人間！？

明久「だ、誰？君は」

ムルムル「ムルムルじゃよ書いてあつたじゃろメールに」

あー書いてあつたな確かでも…眠くない！

ムルムル「着いてこい明久よ他の所有者はもうきているぞ」

明久「了解だよ」

そして僕はムルムルの後について黒い穴の中に入ってしまった。





未来日記所有者達！！

明久 side

ムルムルの後について行くと石の道が現れた。

明久「ねーねいつまで歩くの？」

ムルムル「もう少しじゃ……ほれ見えてきたぞ」

ムルムルが指をさした方向には、石の扉があった。

明久「ここはいつの時代なの」

ムルムル「第三十八因果律……時代は知らないのじゃ」

何か適当だね随分と

ムルムル「このあとは一人で行くのじゃ」

そして石の扉を進んでいくとそこには……

明久「（ひ、広い！）」

そこに居たのは、僕を含めて12人の人。

そして真ん中に穴が空いていてその穴の回りに12この出っ張りが  
ありそこに人がたっていた。

デウス「全員揃ったか」

デウス「では、全員が揃ったところで早速この《サバイバルゲーム》について説明しよう」

サバイバルゲーム？そんな話聞いてないけど……

デウス「まずは君達が手にしている《日記》これは、《未来日記》と呼ばれるものだ」

デウス「これは私が選んだ者……つまりここにいる全員がもっている……この《未来日記》は、時間を歪め90日先の未来までの日記が知れるようになっていて、自分の未来がわかるということだ」

デウスがそう説明していると5番目の場所にいる誰かが手を上げた。

5th「俺達の姿は他の《未来日記所有者》には見えているのか？」

デウス「その質問だがお互いの姿は見えぬようになっておりなおかつ声も変わっている」

確かに5thの声はノイズが混じってた。

8th「何度かこの《日記》が勝手に換わるが目撃しているが……？」

デウス「ウム、所有者達の行動次第では《未来》は変わる」

6th「待ってください！何もしなくても未来が変わることがありましたかそれは？」

デウスはフツと笑うと……

デウス「それは近くに《未来日記所有者》がいて未来を変えた……では」

明久「それじゃあ自分が死ぬのも分かるの？」

デウス「《DEAD ENDの予告》…日記所有者が他の日記所有者を「殺すことが確定したとき事前」に《死の宣告》がなされる事にしたのだ」

デウス「これは未来を変えても回避不可能な《死》だ、いわゆる「摘み」の状態だな」

回避不可能！じゃあ死んじゃうじゃん！！

10th「僕から質問してもいい？…殺すといってもお互いの姿は分からないじゃん！」

デウス「それは自分の《未来日記》の情報から推測をする」

5th「ゲームは相手の正体探しから始まるわけだな」

明久「ば、バレれば死ぬってこと？」

デウス「正体を突き止め《DEAD ENDフラグを立てる》万一立てられた場合奇跡にかけ《死力を尽くして回避する》…それがこの《サバイバルゲーム》の基本となる」

デウス「そして、この《サバイバルゲーム》を勝ち抜いた最後の一

人には、この私の後継時間と空間を支配する《神の座》を譲ろう！  
！！」

やっぱり何か凄いのには巻き込まれてるよ！

デウス「死か生か《殺される前に殺せ！！》そして《神の座》を勝ち取るが良い！」

9th「弱い奴から狙うこれ基本…なので1stお前だ」

え！待つて何かおかしくない！

5th「ハッハハ頑張れよ1st！俺は忙しいからな」

4th「大丈夫だ必ず君は助ける」

デウス「コレにて閉会する！」

明久「まっ……」

そして僕達は元々居た場所に戻された。

明久「や、ヤバイよ絶対に狙われる！……武器でも買おつかな  
それより寝よ」

――

朝だよ！！

明久「変なことになってるよ!!」

明菜「ヤバイよ!遅刻するよ明兄!」

そっいつてる明菜も遅刻しそうじゃん。

明菜「目覚ましがないんだもん!」

玲「ほら、二人ともご飯は作りましたよ」

二人「ありがとー!!じゃあ行ってくる!」

学校

翔子「…おはよー吉井」

明久「おはよう霧島さん!あれ?木下さんと愛ちゃんは?」

唯「遅刻らしいよ!さっきメールがあつた」

明久「おはよう唯」

雅樹「遅刻ギリギリ…だなハアハア」

明久「おはよう雅樹」

雅樹「ああおはよう明久」

何かスッゴい息上がってるなあゝ多分全速力でここまできたんだろ  
う。

先生「皆さん席に座ってください、転校生の紹介をします」

転校生？……ああ真北達か

先生「それでは入ってください」

そして入ってきたのは…夕紀華に和樹、漣……あれ？真北は？

夕紀華「どうも、久世夕紀華と申しますコレからよろしくお願いします」

な、何だろいつもの夕紀華と違う絶対違う！！

和樹「古川和樹です、よろしく」

漣「冬島漣です…よ、よろしく願いします」

漣……かなりテンパってね…噛んでたもん。

愛子 優子「遅れました！」

和樹「おっ、愛子遅刻か？」

愛子「カッキー…そうか！転校生でくるって話だもんね」

漣「愛子…真北はFクラス行った」

マッキー「やっぱりFクラスいったんだ……ノーコメントでいかせてもらうよ。」

先生「もう一人転校生がいますが…現在来ていないので「すみません、遅れました」……何かあったんですか？」

？「大変申し訳ない、少し朝から用事がありまして……」

初日から遅刻とは、しかし朝から用事って気になるなあ。

先生「自己紹介をしてください黒柳くん」

大和「了解しました、僕の名前は黒柳大和です、気楽に話しかけてください」

先生「それでは、皆さんそれぞれの席に座ってください」

みんなどこに座……皆僕の近くじゃん！！

大和「よろしく……ゴメン名前が分からなくて」

明久「明久だよ、よろしく」

大和「明久君よろしくね」

和樹「夕紀華そろそろ猫かぶり止めろ」

夕紀華「ファースト印象は大事でしょ……そんな事言ったら和樹だって目つき鋭くしてたじゃん」

明久「何か凄いね…皆」

漣「よろしく、明久」

明久「よろしく 漣」

何だろ…やっぱり漣との話が一番落ち着くよ。



未来日記所有者達！！（後書き）

未来日記の所有者は原作とはかなり違います！

オリジナルストーリーもありなので！

オリジナルの日記お待ちしております。

キャラクターも！

腕輪も待ってます！

## 日記所有者の襲撃！（前書き）

どーもバカと不幸です。

大変申し訳ありません。

若干熱があるのとテストが近いと不幸が重なりましたなので……更  
新が遅れる可能性があります。

早く治して投稿したいと思います（T|T）

身勝手で申し訳ありません

## 日記所有者の襲撃！

授業終了！

明久「ふう〜授業終わった！」

雅樹「帰るか明久」

明久「そうだね！」

？「ごめんね、職員室わかる？」

誰だろ？……同学年にいたかな？

？「君の名前は？」

明久「吉井明久だけど君は？」

？「やっぱりあなたがね……私は……9th！」

なんだって！あの時最初に僕を狙ってた！

9th「1st！予告どおり殺しにきたぜ！」

そういった後突然廊下が爆発した、そして煙が当たりをたちこめた。

明久「うわっ！煙で周りが見えないよ！」

雅樹「なんだよコレ！」

9th「ここには沢山の所有者がいると出ているからな！一網打尽にしてやるよ！」

煙が無くなった時にはもう姿は消えていた。

明久「何で僕の正体がばれた」

雅樹「なんの話だよ明久！」

明久「雅樹はここで待ってて」

とにかく今は9thを探さないと！何で僕の事が分かったんだろ！

明久「しかしさっきの言葉気になったな」

とにかく学校中を走り回って探すか。

-----

明久「無差別日記にも反応無しか」

？「アッキー何してんの？」

明久「愛ちゃん！何でここにいるの？」

愛ちゃんはそこに立ち止まると僕に携帯を見せてきた。

愛子「武装日記……コレが僕の日記だよ」

明久「なっ！愛ちゃんも《未来日記所有者》ってこと！」

まさか！愛ちゃんが所有者なんてだったら何番？

愛子「僕は10thだよ……さてアッキーここは協力しよう」

明久「う、うん分かった」

ここは見方が多いほうが勝てる確率が上がるはず。

明久「よろしく……では早速行こう」

愛子「まってアッキー武器持って無いよね……はいこれ」

何これ？……えっ！ナイフ！

愛子「もし9thとあつたらコレを使って」

明久「何でこ、こんなの持ってるの」

愛子「私の日記が教えてくれた……今日、ナイフ、拳銃が必要だつて」

まって！何でそんなの持ってるの！拳銃何か普通手に入らないよね。

愛子「この日記は、いつどこで武器を使うかまたどこで手にはいるか、後どんな武器を持っているかなどね」

明久「僕の日記は「ドカーン！」な、なに！」

愛子「どこかが爆発したんだと思う」

明久「僕達の行動が分かるのかな」

愛子「多分分らないと思う分かってるなら直接くるはず」

確かにそうだねわざわざ爆弾何かで攻撃してこないもんね。

愛子「あと今回の目的はアッキーに《DEADENDフラグ》をた  
たせること、今アッキーにたってるでしょ」

明久「本当だ、校庭で後20分後に死ぬ！」

覆さなきゃ！奇跡をおこすんだ！

明久「ここに至って未来は変わらないだったら行こう校庭に」

愛子「だね僕にもたってるよ……爆弾で死ぬってね」

明久「絶対に倒してやる！」

30後僕達は大変な目にあったそれは……

## 自己中心日記（前書き）

これから投稿が不定期になりそうです……金曜日から火曜日まではテストがありますので更新できません（T―T）

それでは本編へ

## 自己中心日記

明久 side

愛子「今、9thは爆弾とナイフを持っているよ」

明久「ここもダメだ……階段の全部に爆弾がついてるよ」

愛子「どこについてるかわかる？」

場所なんて書いてあったけ？……あった！

明久「階段の12段目だつて」

愛子「私の日記は知ってるよね」

明久「武装日記でしょ」

愛子「そこまで知っていて分からないの……」

ここでも馬鹿と言いたいのかな？流石に酷いよ！

愛子「解除する方法がここに書いてあるの」

明久「なる程……それがどうしたの？」

愛子「ここまで馬鹿とは思わなかったよアッキー……」

また馬鹿にしたな……っ！なる程分かった分かったよ！



明久「爆弾を解除するんだね……でも時間からない」

愛子「そうだね……だったらこうしちゃおう」

愛ちゃんはそう言ったあと落ちてたゴミを拾って……爆弾の方に  
投げたね「しゃがんで！」

「……へ？」

ズドーーーーン!!!!!!

明久「うおおああああ!!」

愛子「確かにこっちの方が早いね」

そうゆう問題じゃないでしょ……なんか大胆になったね愛ちゃん  
…。

明久「まあとにかく校庭に行こう！」

僕達は昔階段だった場所を進み始めた。

校庭

明久「きたはいいけど……9thはいないね」

校庭をみわたすかぎり人影は無いそれどころか人がいない。

愛子「まさか僕達騙さ「そんな事はしねえよ！」だ、誰！」

9th「私だよ…名前を名乗ってなかったな私の名前は土根崎みより《しねざきみより》だ！」

「

明久「日記所有者だな」

みより「当たり前だろ、9thって行っただからよ」

いちいちムカつくしゃべり方だな、しかし何で僕の正体がばれたんだ。

みより「自己中心日記、私の日記は1日12回自分の思った事を予知できる」

愛子「地味なチートだね」

明久「そんな事より他の生徒はどうした！」

「

みより「落ち着け……全員無事だ、ただし全員クラスから出られない」

ならいいや……人質とかしないんだね。

みより「悪いが神になるのはこの私だ」

愛子「ねーこの学校に所有者が沢山入るって話だけど何人いるの？」

みより「教えねーよ！知りたければコイツを探せ」

みよりはこちらに紙を渡してきた。

明久「5th？」

みより「この学校にいるらしいんだがどーも正体が掴めない」

愛子「コイツを探せと………言っの？」

みより「ああそうだコイツを探してもらってる間は攻撃をしない………見つけたら私を呼べ」

確かに良い案だね！DEADENDフラグも消えるし。

愛子「信用できない」

みより「だったらコレを持ってる」

みよりはこちらにドクロのネックレスを投げてきた。

みより「それは、私の一番大切な物だ」

明久「分かったよ」

みより「飲み込みが早くてすむ……頼んだぞ」

明久「分かった」

そして突然現れた車に乗ってさっさといった。

愛子「5 t h……探さないかね」

明久「うんそうだね」

校庭は前のように風の音だけが響いた。

## 自己中心日記（後書き）

### 自己中心日記

自分の思った事を予知できるといいが予知ができない場合がある。

1日に12回予知が可能（DEADENDフラグは別）

所有者 土根崎みより 9th

学校休暇……季節は夏……海しかないでしょ!!!!!!

明久side

現在僕は車の中にいる。

愛子「いやーやっぱり夏は海だね」

優子「何かすみません私達まで連れて行ってもらって」

玲「いいえ、明くんがどうしても皆を連れて行きたいと行っていたので」

人が沢山いたほうが遊ぶ方法が増えるでしょ、それに家族だけだと僕の《全て》が姉さんに奪われそうだからね。

明久「しかし人数もピタシで良かったよ……」

雅樹 和樹「嘘はつくな明久後ろの車を忘れたか？」

明久「覚えてるよ、たしか雄二と秀吉と霧島姉妹とムツリー……誰だっけ？」

プルプル

明久「あつ！電話だ……ブチ……さあ海楽しみだね！」

雅樹「電話でろや……」

こんな都合よく真北からかかってくるんだもんやだよ。

漣「しかしまさか登校初日に『国際犯罪者』がくるとはね」

夕紀華「確かにね、学校の一部が爆弾で無くなったせいで学校は休校……私はいいけどね」

明菜「そうなんですか！知りませんでした！」

愛子「もしかして聞いてなかったの？」

明菜「はい、二人には『明日から海行くよ』としか聞いてません」

明久「まあいいじゃん」

よくないけどね、実際は。

漣「それにしてもトンネル長いね」

玲「お待たせしました、皆さん右側を見てください」

トンネルが開けるとそこには、コバルトブルーの海、ハワイのような道、ヤシの木が道の横に立っていた。

夕紀華「す、凄い場所にきちゃったね」

優子「た、確かにそうね」

明久「懐かしいな、姉さんここ来たの何年ぶりかな」

玲「何年ぶりでしょうか中学になってきていませんから……4年ぶりですかね」

そんなにたつんだね……懐かしいなあ。

漣「私達は来たことなかったよね」

夕紀華「確かにね……こんなに沢山家に入るの？」

明菜「入りますよ、8LDKだからね」

明久「リビングは広がったよね」

玲「そうですね、確か……50畳でしたからね」

他の皆「(まさかのお金持ち……あの明久<sup>アッキー</sup>がね)」

皆の視線がこつち向いてる……何でだろ？多分霧島さんの家の方が広いと思うのに。

雅樹「ち、ちなみに聞くが明久の両親は何をしているんだ」

明久「母さんがアメリカの銀行で働いてて父さんは……何だったか？」

玲「フテルビヤホテルオーナーですよ」

漣「す、凄いよ！あの5つ星のホテルだよね」

明久「えっ！皆知ってるの？」



夕紀華「知ってるも何も、一流のホテルだよ！」

そうだったんだ……でも父さん「俺のホテルはまだまだレベルが低い上には上がいるからな」って言ってたけど。

明菜「そろそろ着きますよ皆さん」

優子「よくわかるわね、そんなの」

明菜「私の記憶力は明兄の5倍だからですよ」

明久「遠目にバカにされたような気がするんだけど」

雅樹「気にするなバカはバカだ」

失礼な僕は一応Aクラスだぞ。

ブーブー

明久「メールがきた……何でそんな事予知してんの……」

みよりからメールがきたそこには「後30分後に鼻血を噴射して倒れるって日記に出てるぜ見れないのが残念だ」……だから何でそんな事予知してんの。

愛子「アッキー皆の前で「日記」の事を言うのはやめて」

と耳元で呟いてきた。

明久「ごめんごめん」

玲「着きましたよ皆さん」

雅樹「さてと、早速泳ぐか！」

明久「そうだね！」

そして僕達の車で女子が着替えて、後ろの車で着替えることになった。

-----

少し時間がたった！！

気にしてなかったけど、もう30分たちそうだよ……外したな。

愛子「皆着替えてきたよ」

康太 明久「ぐはあああ！！」

僕達は鼻血を出して気絶した。

？「お……………て…アツ……………もお……………！」

誰かが近くで騒いでる…なんていつてんだろ…。

？「明…起きな…いと……………よし！いい…だ…」

ビシャー…！

明久「うわ…！！何するのさ…！」

康太「……………同意見だ」

ムツツリーニも水かけられたんだ。

雄二「お前らはだらしな「何いつてんの雄二」……………やめろ梨花気持ち悪い」

梨花「ぶっ潰すぞクソ野郎」

この二人……………真北と夕紀華みたいだね……………。

海だ！夏だ！水着……鼻血がとまりばべん！！

ムツツリーニside

…夏はオレの商会の売り上げがあがる……何故だか分かるか…そうこれアガル、ブファ！！

秀吉「またムツツリーニが鼻血を出して倒れたのじゃ」

雄二「おい明久、輸血パック持ってきてくれ」

明久「分かったよ雄二」

クソまだ30枚しかとっていないのに……視界がせばまってい………。

雄二「還ってこいムツツリーニ……すまない明久に連絡してくれ」  
今からムツツリーニを運ぶからAEDを用意してくれって」

真北「これは完全に逝っちまったな」

和樹「もしもし明久かAED用意しておけ……おお……頼んだぞ」

雄二「運ぶぞ俺は足を持つから真北は手をもて」

真北「了解」

そしてムツツリーニは明久がまつ車に運ばれた。

愛子 side

ん？何か浜辺の方が騒がしいなあ

梨花「ムツツリー二が倒れたんだな」

優子「ねえムツツリー二つて誰？」

あれ？優子ムツツリー二君の事知らないの……………あれ名前なんだっけ？

翔香「土屋康太…寡黙なる聖職者だったはず」

愛子「聖職者じゃなくて性職者だよ」

翔子「…愛子言葉で言われても分からない」

そつだよね……………良い説明方法思いついたよ！！

愛子「「放送禁止だよ〜ん」の性だよ」

漣「……………愛子そのたとえば駄目だよ」

夕紀華「どう意見だね」

別に変な事言っていないんだけどなあ〜ただ「またもや放送禁止」って言っただけなのに。

玲「皆さん、お昼ご飯にしませんか？」

皆「それで……………な、なんてナイスバディ何ですかー!!」

翔子「……………絶対に負けた」

翔香「まだチャンスはある」

梨花「自信喪失ってヤツだね」

アッキーが鈍感な理由って……………まさかね。

明菜「ご飯は外に用意したのでそのまま来ても大丈夫ですよ」

漣「吉井家は何で皆ナイスバディなの？」

夕紀華「アメリカ育ちだから？」

漣「私達もアメリカにいたよ」

愛子「何か二人とも魂が抜けたみたいになってるよ」

たしかに、明菜ちゃんの身体つきはモデルみただけど……………負けてない!!はず

明久「あれ？もうご飯？」

明菜「軽食だけどね」

雄二「それにしても……最高だなこは」

明久side

雄二が感動に浸っているけど……醜い顔だね。

雄二「明久俺にたいして酷い事考えなかったか？」

明久「別に考えてないけど」

雄二「ならいいや、さて頂きますか！」

真北「いやぁ～お腹すいたから……沢山食べますか！」

明久「さて何から食べようかな」

僕の目の前には、サンドイッチ、ケーキ（たぶん買ったやつ）、その他もろもろ沢山おいてある。

雄二「いただきます」

さて、僕もたべますかー！

4th side

4th「文月学園……匂うな《日記》どつりなら此処に9thが現れ

たらしいが……」

1 2 t h 「文月学園になにかようですか？…… 4 t h 」

4 t h 「……何の話だ？……といつても駄目か」

1 2 t h 「俺の《日記》に学園前に不審者がいるとな」

まさかここまでバレているとは。

4 t h 「何のようだ？俺を殺しにきた……訳ではないな」

1 2 t h 「少し協定を結びたくてな」

4 t h 「利益がないと思うが？」

隙について俺を殺そうとしてきてるのかコイツは！

1 2 t h 「俺の名前は天草翔だ」  
あまくさかける

4 t h 「俺の名前は空野佑樹そらのゆうき雑誌記者をやっている」

佑樹「後忘れていたが俺の日記にはこうでている」

――――――――――

同時刻

みより「1 s t の奴鼻血を出して倒れるか……笑えるな！ハッハハハッハハ……って笑ってる場合じゃねな」



ドアに向かってそう呟くと。

？「計画しなくてもいいじゃろ……僕は普通の武器商人じゃよ……  
お前さんの言うとおりじゃった」

みより「信じるよニ力爺さん」

ニ力「5thは……じゃった」

みよりは口角を引き上げてからこう言い放った。

そして二人の声が重なった。

みより 佑樹「未来日記所有者の本格的な戦争が始まると予知された」



海だ！夏だ！水着……鼻血がとまりばべん！！（後書き）

タイトル変えようかな……悩んじゃてるよ僕……

## 未来日記所有者 人物

1st 吉井明久

日記 無差別日記

無差別日記

自分を中心とした周囲の未来を無差別に予知する能力。

未来日記の中では莫大な情報量を誇るも、一字一句自分の事は書いていない。

そしてこの日記は、明久主観のため偽情報が流れた場合、間違った未来が日記にでてくる。

2nd 不明

3rd 岸本高来

年齢 63歳

特徴

スラックスにシャツにネクタイをし黒色の白衣を着ている爺さん。

髪の毛は白色でオールバックにしている。

## 日記 技術開発日記

### 技術開発日記

高来が所持している日記で、実際の日記はパソコンでデウスも想像がつかないものも作ってしまう。

自分が未来で作るであろう、道具の設計図が書いてある、他の日記所有者とは違い何年後の未来が書いてあるかは、知らない。

現在開発しているもので

T h a t c h e r

敵の動きを先に感じ取り、未来日記みたいに更新される、欠点は一回予知すると途中で書き換わることは無い。

m a g n u m

自分の脚力を上げる、人間では不可能な動きをする事ができる。

4 s h 空野佑樹

年齢髪の毛は黒くテンパ、つり目の赤眼、中肉中背鍛えている訳でもなく鍛えていないわけでもない。

## 日記 スクープ日記

### スクープ日記

コレから起こるであろうスクープが予知される。

未来日記所有者同士の戦いは、死者、行方不明者、ビルの崩落などがあるため予知されやすい。

スクープのためなら命も賭けるといふ信念を持っている。

結婚をしており妻と子供がいる。

5th 不明

6th 不明

日記 the royal diary

7th 不明

8th 不明

9 t h 土根崎 みより

年齢 19 歳

特徴

身長はそんなに高く無く、左の歯が牙のように尖っている。

まだ幼さが残る顔立ちでもあり、変装する事もたたある。

日記 自己中心日記

自己中心日記

自分の思ったことを予知する事ができるが1日12回と限定されているため最強の日記でもあり最弱の日記でもある。

ただし、DEADEND予告は関係なくでてくる。

10 t h 工藤愛子

日記 武装日記

武装日記

自分のこれから使う武器、防具の出所や武器の作り方なども載っている、他にも敵がどんな武器を所持しているかなどが書かれている。

11 t h 不明

12th 天草翔

年齢24歳

特徴

何もかもを見透かすような、紫色の目、そして髪の毛は茶色で目元まで伸びている。

今までは、眼鏡をかけており生徒からは「地味」というあだ名が付けられていたが、今はコンタクトに変えており、先生の中では初のファンクラブができています。

日記 教師偵察手帳

教師偵察手帳

学園で起きるであろう事が書かれてた手帳。

未来日記の中では珍しく携帯ではない、しかし学園で起こった事件は詳しく書いてあるため「学園限定の無差別日記」とも言える。

学園外の事も書いてはあるものの情報量はかなり少ない。



## 日常はすぐに消える（前書き）

話の内容が思いつかない何て最近あるんです

、結果を決め手から話を書いていくのですが結果が思いつかない…

…まあそんな事は気にせず本編へ

## 日常はすぐに消える

明久 side

結局あの後、ガヤガヤ騒いでるうちに夜になってしまった。

明久「寝る場所は、ここに書いてあるからここを見てね」

雄二「おい、待て、何で俺は外何だ？」

明久「気にしたら負けだぞ雄二」

雄二は外で充分でしょゴリラ何だし。

翔子「……私と翔香は一緒の部屋でいいよ」

真北「俺と和樹は車で寝るから女子達は部屋を使ってくれ」

康太「…同意見だな…そう言えば秀吉がいない」

秀吉「ワシは、ずっとここにおるが？」

明久「分かった秀吉と木下さん一緒、関節はそっちには回らないはずだよ!!」

何で関節技かけられてるの！秀吉は女の子じゃん。

秀吉「ワシは男じゃよ」

優子「しかし見れば見るほど、優子にそっくりだね」

明久「一応寝る場所決まったね！それじゃ風呂に入ろう！」

康太「…風呂……ブシャー！！」

夕紀華「土屋から鼻血がでてるよ」

漣「ゆ、輸血パック持つてる人いませんか？」

明久「秀吉！AEDを雄二は心臓マッサージをして僕と真北で輸血パックもってくるから」

雄二「風呂で何を妄想したんだ！コイツは」

和樹「流石、混浴とかにつながったんだろ」

そして僕達による、ムツツリー二復活作業が始まり、予定より風呂に入るのが遅くなってしまった。

――――

車

明久「いやゝしかし今日は疲れたね」

真北「確かにな、おい和樹飲み物ここにあるか？」

和樹「無いよ……とってこようか？」

真北「いやいい、自分でとってくるわ」

真北は、車から降り歩いて向かって行った。

明久「雅樹はどう、思う？」

雅樹「主語がねえからわからねえとしか言えねえよ」

和樹「同感だな、何か後ろの車やけに静かだな」

突然車の扉が開いた。

真北「な、何だよ……まさか俺がいたのわすれたか？」

撤回する、後ろが静かじゃなくて、僕達がウルサイんだね。

真北「しかし、明久の家は凄いな飲み物の種類がハンパなかったぞ  
！」

明久「しかし、一泊二日は短いね」

和樹「花火何かあげたら、楽しかったかな？」

雅樹「また今度やればいいよ」

ザザザザ

明久「ん？……今の音！」

未来が書き変わった！

こんな、楽しい事がいつまでも続けばいいと願っていた……分かってはいた、しかし大事なかけらが僕の手からこぼれ落ちた。

ドッカーーーン！！！！！！

僕達の車は何メートルは吹き飛ばされ、しかも何回も回転した。

雅樹「な、何が起こった！」

明久「車からでしょう！」

車から出た、僕が見たのは想像を超えた世界だった。

真北「雄二とかが乗ってる車が燃えてる……」

雅樹「……嘘だろ」

そして車から少し離れた場所に人を引っ張っている男がいた。

明久「いや！まだ生きてる！」

真北「走って向かうぞ！」

和樹「……生きてくれよ！」

そして僕達が雄二達の元に行く

雄二「何とかギリギリ……生きて……られたぜ」

秀吉「ムツツリーニの……あ、しに」

秀吉が指をさしたほうには、足に鉄が刺さってるムツツリーニが倒れていた。

康太「い、一生の不覚……だ」

和樹「だ、誰がこんな事をやらかしたんだ……！」

？「いやいや、まさか死なないとは思わなかったよ」

明久「誰だお前！」

？「私か？私は岸本高来未来日記所有者だ」  
きしもとたかき

愛子「アッキー……大丈夫！」

高来「お前は……10thだな」

雅樹「くそ！女子をこんな危ない奴と戦わせるかよ！」

高来「ハァー無駄な犠牲を」

高来は、懷から拳銃を取り出し雅樹の腹に発砲した。

雅樹「クバァ！」

明久「雅樹！！！！高来！ふざけんじゃねえぞ！！！」

高来「年上には敬語を使うものだよ、1st」

雄二「和樹！雅樹を連れて逃げろ！真北はムツツリー二と秀吉を！」

和樹「生きるよ…雄二」

真北「コイツらを安全な場所に連れてったら、戻ってくるからな！」

雄二「明久行くぞ…工藤、お前は どうする？」

愛子「もちろん、日記<sup>コレ</sup>を使うけど」

携帯をポケットから少し見せた。そうすると雄二は、薄く笑い。

雄二「おい！3rdこつちには3人も日記所有者がいるんだぜ？」

高来「それは、参ったしかし大人を舐めるなのは良くないな……教育をしないで」

愛子「僕達しては、大人に反乱するのが趣味だからね」

そして、後ろの車がもう一度爆発したとき、戦闘が始まった！！

日常はすぐに消える（後書き）

オリジナル小説書きました！

ぜひ見てください



倒す敵はただ一人！

明久side

雄二「オラア！！」

高来「甘いな、時に坂本少年、君はタバコを吸ったことあるかね？」

雄二「未成年者だからすうわけないだろ」

高来「箱からタバコを取り出すとき、指で箱をトントンと叩くだろう？私は子供の頃、あの動作がとてもカッコ良く見えてね…意味が無くとも、お菓子の箱をたたいたものだ」

雄二「話が長い、家の学<sup>ババア</sup>園長みたいだな」

高来「年寄りには、そんな者だ、今の君がしている事はそれと同じだよ」

高来はポケットから、タバコを取り出すとそれをトントンと叩いて一本出した。

明久「僕には、何が言いたいのかわからないんだけど」

雄二「とにかく、殺したくなるような事を言っている」

高来「ふうータバコとは吸ってみればわかるがとてもいいものだ、気持ちが悪くなく」

明久「ニコチン中毒？」

タバコを持ち運びができる灰皿にしまうと高来は。

高来「いつもはポイツと捨ててしまっただけだね、子供に悪影響がありそうな事はしないのだよ」

その時、明久の持っている携帯が「ザザザザ」とノイズ音を発した。

高来「時に坂本少年、最先端科学技術とは素晴らしい物だな…フルばれた道具など、最先端科学技術の前では、ネズミが人間に戦いを挑む物だ」

雄二「説明が長いんだよ！！」

雄二が高来に殴りにかかるうとしたとき、まるでそれが予知されたかのように避けられた。

雄二「なっ！このジジイ！！」

高来「日記は完璧だよ、しかし完璧ゆえに欠点があるんだよ」

そして二どめのノイズ音になった。

明久「なっ！雄二ソイツから離れて！」

雄二「待て！日記どう……嘘だろ」

高来「それが、欠点何だよ坂本少年」

ポケットから出した投げナイフが雄二の本に飛んでいった。

愛子「ま、間に合わない！」

愛ちゃんもナイフを取り戻していたが、当てられそうにないらしい。

？「困るね、私の生徒に手を出してもらっては」

？「スクープどうりだな！、静岡県熱海市かの有名な吉井家別荘地で爆破事件！犯人は日記所有者！とな」

雄二「地味？」

翔「酷いな坂本君、せっかく助けにきたのに」

佑樹「早速だ、がお前の日記は危険何で……排除させてもらうは」

高来「失礼だな、私の日記は「技術開発日記」どこが危険だと言えるんだね」

高来はその場で一回転をした。

佑樹「当たり前だろ、俺の日記は「スクープ日記」お前が違法開発をしていることを予知してんだよ！」

高来「ハッハハ！私が絶望したのは、15歳の夏のころ……丁度これぐらいの頃だな、私は花火を見た……その時とても儚かったものだ、一瞬の輝きはとても美しかった、だから私は自分で造ってみた……しかし、どれだけ沢山の花火を造ろうと儚く全て散った」

雄二「もう一度言う、話がなげえんだよ」

高来はふうと笑うと、スマートフォンを取り出し何かを操作し始めた。

翔「死ぬきになったか」

高来「そんな事は無い、コレはただの小手調べだ」

高来の持つ携帯から、ピーと電子音がすると小さく笑って。

高来「私はまだ死ねないからな」

そう呟いた後、高来を取り囲むように地面が盛り上がった。

翔「な、なんだ！」

そして僕達の立っている場所が爆発した、そして僕は木に全身をぶつけた。

見えなくなる、視界の中最後に聞いたのは。

高来「ここで殺すの勿体無い、私はそんなつまらない殺しはしないんだよ」

高来は海の方から来た、ヘリコプターに乗っていなくなった。

そして僕は気を失った。

倒す敵はただ一人！（後書き）

すいません！

早速一人殺そうと思ったのですが……殺せませんでした。

## 嵐の去った後

明久 side

文月病院

……瞼を開けようとすると、僕の視界が白く塗りつぶされている。

？「お……」

お？……誰だ君は？俺はそんな声の子供しらねエが？

？「い……ま……の？……そ……ろ起きな……」日記「こわすよ？」

僕のこの寒気がするような事を言われ起きた、正確に言つと瞼をかつと開いた。

愛子「やっと起きたよ……それで大丈夫？」

明久「僕は、何日かン寝てたの？」

雄二「2かかん、だな大丈夫か明久？」

僕の目の前には、頭に包帯を巻いた雄二と絆創膏とシップを見えるだけでも、かなり貼っている愛ちゃんがいた。

かなり強く、頭を打ったことしか、覚えてないよ。

愛子「簡潔言つよ……僕達は3rdに、負けたそれもコッチには、5人も日記所有者がいてね」

雄二「完敗だ、後他の皆は先に帰した」

明久「僕が起きることが分かったの？」

明久がそう雄二に尋ねると、ドアを叩く音がした。

翔「入るよ、吉井君」

明久「はい、どうぞ入ってください」

翔「あの時ぶりだね…脳にかなりのダメージがあったようだが」

明久「そのようですね、でもこのとおり元気ですよ」

雄二「では、コレからのことを考えよう」

愛子「しかし、あの時は焦ったよね、それじゃあ自己紹介でもしますか、僕の名前は工藤愛子、日記は……内緒よろしく」

勝手に自己紹介を始めた愛ちゃんはこっちに目を向けてこう言った。

愛子「次はアッキーだよ」

明久「えーッと僕の名前は吉井明久、よろしく」

雄二「俺の名前は坂本雄二……フットボールだよよろしく」

あれそんなことまで言うの？何番目までは言っていないんだけど？

翔「名前は知ってると思うから、いわないでおくよ、僕は12th  
よろしくね皆さん」



先生が説明したあと、雄二が一枚の紙を出して、それを僕のベットについている机に置いた。

雄二「現在、日記所有者で分かってるのが…1st、3rd、4th、9th、10th、12thだな、このうち3rd以外は味方と考えていいだろ……問題は5thだ、みよりの情報だと、文月学園にいるといわれている」

翔「しかし何で、こんなに文月学園に集まっているのだろう」

雄二「それを考えるのは後です、俺達から見ても、3rd、5thは気をつけたほうがいいと思う」

愛子「逆に、5thは僕達の存在を知っているの？」

雄二「知っていた場合……俺達にはDEADENDしか待っていない」

何で、僕達にはDEADENDしか待ってないの？

翔「なる程……だったら少し日記を使うのは控えよう」

愛子「もう気づかれているとみて行動するのか……スリルありすぎでしょ」

明久「ならまず、5thを探してみようよ」

雄二「遠目に俺はそう言ってんだよ、話を聞け」

ん？突然愛ちゃんが周りを見だしたけど、どうしたんだろう？

愛子「テンパのおじさんいないね」

翔「アイツは情報記者だとか」

雄二「とにかく、5thを探し出してから、もう一度会談だ」

皆「了解」

そして、皆外に出ていった中一人病室に残った明久携帯を取り出した。

明久「ゴメンね皆……もしもし」

携帯からは、ノイズがかかっているが若い女声がした。

？「どうしたの？明久君？」

明久「今どこにいる？」

？「いまあゝコンビニだけど……そっちには行けないよ」

明久「分かってるよ……後どお？そっちは？」

？「あまり変化は無いねえ」

明久「了解じゃあね」

？「バイバーイ」

明久は電話を着ると窓から見える空をみてつぶやいた。

明久「僕は、いや俺はいずれ裏切らなければならない時が来るなんて」

-----

とある島

ここには一つの研究所があるそこには、黒い白衣を着て、白髪の男  
そう、岸本高来である。

その研究所の中に音も立てず、少女が侵入した。

？「ねえ、何してんの？」

高来「き、貴様！だ、誰だ！」

？「私？…ん、ん私は「6th」だけど」

高来「どうやってここに侵入した！」

？「声がデカい……普通に入ってきたけど？」

高来「そ、そんな事はない！ここのセキュリティはそこらの研究所の5倍はあるんだぞ！」

？「それは、思った……でも私の日記の前では無意味だけどね」

6thはポケットから携帯と拳銃を出し高来の足を撃ち抜いた。

高来「ぐああああ……！！この小娘が……！」

？「一々うるせえな」

6thは、高来に拳銃を突きつけしゃがんで話していた。

？「本当さあゝ無口の振りつて難しいんだよねゝ明久は」

高来「く、クソ！私はま、まだ死ねない！」

？「うるせーな、命ごいする時間があったら……抵抗しろよ」

6thは、高来に拳銃を発砲した、多少は抵抗したが、すぐに動かなくなった。

高来が最後に見たのは、返り血を浴びた少女とその少女の左右違っていた目であった。

## 嵐の去った後（後書き）

雄二「皆、誤解しているようだが俺の日記は喧嘩日記じゃないぜ」

**戦火 戦争はもう始まっていた！（前書き）**

今回の小説から少し書き方を変えたいと思います。



## 戦火 戦争はもう始まっていた！

7 / 28 6時28分

文月学園から少し離れた公園に少女が一人寂しくブランコを揺らしていた。

それを見た一人の男は、鞆の中からチョコレートを出してその女の子に渡そうと歩き始めた。

佑樹「その、お嬢さんこんな時間に何をしているんだい」

？「何もやること無いから居るんだよ」

佑樹「そうか……なら家来るか？」

？「軽いナンパ？」

佑樹「こんな、ガキナンパしないよ」

見るからに不機嫌な顔をした、少女は大きな一歩でこちらに歩いて

きた。

？「誰が子供だ！私は、16歳だ！」

佑樹「それは、悪かったな……だったら家帰れ」

？「悪いね、それはできないんだ」

ザザザザ！

突然の出来事に頭がついていかなかった空野は、少女の方を見るも自分の腹に変な感触があることにきずく、

佑樹「グフウ……まさ……な、俺……か事……件に……ハア……ハアまき……こまれる……なん……うう！」

？「うるせーな！お前が日記所有者だってことぐらい分かってたんだよ！」

さっきまでとは考えられないほどの、大声を上げて空野から、バツクステップをとり離れた。

？「お前達には借りを返した……しかし、あのじいさん勝手に未来日記所有者とか名乗りやがって！」

佑樹「どう…ハア…いうこと、だ」

？「分からないかな〜！もう3rdは死んでんの、でもアイツを殺すとは！厄介だな〜」

佑樹「DEADEND…ハア……後3分で死ぬのか……」

血に塗れた手で、携帯をあけ画面をみると、それをあざ笑うかのようにこちらにナイフを向けていた。

？「お望みどおり、3分後に殺してやるのか？……でも残念ながら時間が無いんだ」

佑樹「……………お前が…だれかはしらん……しか…し……………グフウ！…うおおあああ！…！！！」

？「うるせえな！…さっさとさっさと死ねよ！」

傷口にナイフの柄を当て、ゴリゴリとえぐり血が砂に飛びとても可哀想すぎて見られないという状況が続いている。

？「ギャハハハハハハ！おいおいもう終わりかよ！」

佑樹「……………オレハ……………ダッテナ……………」

空野は最後まで自己満足したかのように笑って死んだ。

？「つまらねえや……………しかし人を殺すのは思ったより簡単だね……………」

その少女の後ろから、金髪にサングラスをかけた少年が現れた。いわゆる、チンピラみたいな格好をしている。

？「お前の日記……………間違えた「孫日記」は強いな……………」

？「そんな事無いよ……………アナタの「孫日記」の方が強いじゃない……………そろそろ帰らないと怒られるね……………」

？「マジすか！……………最悪だ……………早く帰るぞ！おっつ！指紋とか付けてないよな……………」

？「……ノーコメントで…というか日記で見なさいよ！！」

その少年は、携帯を開き少し操作したあと笑顔がこぼれた。

？「美優！俺達が捕まへブシ！」

美優「こんな所で捕まるとか言わないで…しっ—」

？「悪りい、悪りい確かに俺のコイツ《警察情報流出日記》は便利だから」

美優「そんな事聞いてないわよ！…早く行くわよ！」

？「おう！」

そして二人は闇の中に消えていき、バイクのエンジンの音だけが響いた。

戦火 戦争はもう始まっていた！（後書き）

この書き方が嫌なら……教えてください！その場合直しますので……  
それでは！

## 学校再開…

吉井は布団の上で一回転をして、気持ちよく寝ている。

明久「ん……………」

その風景をみると、休日を楽しんでいるという風にも見える。季節は夏、学校がテロリストに破壊されたため休みになっていた。

明久「ん？8時かまだ寝れ……………ないよおお！！！」

明菜「明兄どうしたの！」

明久「大変だ！今日学校があつたんだ！」

明菜「そんなの聞いてないよ」とにかく早く準備して、なんか作るから」

急いだように、明久の部屋を出て行くと明久は何故か睡魔に襲われたがそれはどこと無く消えていった。

玲「明くん起きないとキスしますよ」

明久「起きますよ！起きてます！起きてるからの三段活用！」

玲「三段活用になってませんよ？では罰ゲームとして……」

明久「なんで罰ゲームなの！」

玲「あら？お姉さんに逆らうの？」

明久「くっ！」

露骨に嫌そうな顔している、明久に何かを思いついたかのうに少し微笑んだ。

玲「では、明くん3日以内に彼女をつくってください……出来なければ私の命令を一つ聞くこともし、本当にもし彼女が出来れば……何でもします」

明久「おかしいよね！何でもします」の時顔が赤くなるの！まあ良いけどさ、姉さんみてな3日以内に彼女を作ってあげるから！」



――  
明久「そんな事いつでもできる訳ないよな……ハア確かに僕は美少年だけど……」

雄二「どこから見ても、残念な顔だけどな、秀吉」

秀吉「自覚症状の無いハーレムは見ているだけでいらつとくるのじやろ？ムツツリーニ」

康太「……告白したら誰でもつき合ってくれそう」

明久「何で皆がいるのー!!」

まるで尾行していたかのように、後ろにおり、さも当然のように明久の話に加わっていた。

明久「事实はね……姉さんの罰ゲームでね」

秀吉「主語が無いから分からのじゃ」

明久「ごめん、ごめん…こんな事が！」

明久は今日合ったことをほぼ一字一句抜かさずすべて伝え、

明久「この危機的状況分かる？」

雄二「親友としてお前が…可愛そうな事にあっていると……」

明久「雄二……」

雄二は一拍ためてから……

雄二「本当に飯が上手いは！今日の朝ご飯すごく上手かったからな  
！」

明久「親友にそんな事言わないよ！酷いな！！」

秀吉「でも、実際言っておるではないか」

秀吉がため息混ぜりにそう呟くが、実際少し顔が笑っている。

康太「……偽装彼女作戦」

明久「何勝手に命名してるの!!」

雄二「悪いが明久……困っている明久をみると……尋常ないぐらいイジメたくなるんだ」

明久「尋常じゃないのは君の頭だよ!!」

雄二「まあ、頑張れよ」

秀吉「期待しておるぞ」

康太「……カメラは任せろ」

自信たっぷりはこちらにカメラを向けているが康太だが、

明久「何を任せればいいの!!!!」

8時34分 Aクラス教室内

雅樹「よっ！明久…何かやつれてるな」

明久「実は大変な事があったんだよ……」

大和「何があったんだい？話してみなよ明久君」

また、明久は雄二達と同じように一字一句抜かさず、伝えた一様念のため近くにあった、盗聴器と隠しカメラを壊しておいた。

大和「なるほど、それは大変だね…僕でよければ力になるよ」

雅樹「俺もなるよ、しかし……嫉妬の渦でクラスが破壊されそうだな……」

明久「どういうこと？」

雅樹「親友として、一言言ってやるよ、選択によっては……身を滅ぼすぞ」

大和「……なるほどね……しかしそうすると、安全かつ……明久君が無傷で成功できる方法は……」

大和は、目をつぶり真剣に考えていたが、突然何かが切れたかのように目をガッ！と開いた。

大和「誰にもバレずかつ、無口の子だから……」

雅樹「霧島姉妹のどっちかじゃないか？」

明久「真剣に考えてくれてありがとう！」

大和「当たり前だよ、親友何だからさ」

明久達がそう話していると横から誰かが話しかけてきた。

和樹「何話してんだ？」

大和「君は、古川君だったかな？」

和樹「和樹でいい、で？何を相談していたんだ？」

大和「明久君の今後の未来についてかな？」

明久「僕の未来？そんな大変な事になってたっけ？」

明久「クズ久？アナタはどっち？

明久「だったら、二人に頼んで……ゴメン」

雅樹「クズ久になるところだったな」

明久「だ、だよな」

若干冷や汗を流しながら、返事をした明久だが心の中では、「完璧な考えだよ」とクズの道突っ走っている状況である。

大和「しかし、いい案がなかなか見つからないね」

和樹「確かに、このクラスが血の海にならないようにしなくてはいけないし……」

明久「その意味が分からないんだけど？」

翔香「何話してるの…HR…はじまって…るよ」

明久「ごめん、ごめん実はん、ん!!」

雅樹「気にしないでくれ霧島!」

雅樹は明久の口を封じ必死に隠そうとするも、時遅く愛子と翔子がこちらにきていた。

愛子「君達は何を話してたのかな? 僕の事? それなら何でも教えてあげようか? 勿論<sup>リアル</sup>実技で」

明久 康太「ブシャー!!」

和樹「どこから来たんだムツツリー!!」

康太「……神が俺を呼んでいた、勿論カメラは持ってきている」

雅樹「あんなに鼻血出てたのに治るのはや!! 明久まだ治ってねえぞ」

和樹「なんだ? エロ神か? どうせどっかで盗聴してたんだろ?」



呆れ顔で和樹はムツツリー二を見ているが、周りでは大変な事が起きていた。

雅樹「明久大丈夫かあ！こんな出血量テレビでも見たことねえぞ！」

明久「わ、我が人生……ゲームと漫画とテレビ以外悔いなし」バタ

雅樹「悔いだらけじゃねえか！！」

康太「……輸血パックならここにある」

翔子「……私がやるよ」

丁寧「翔子は輸血パックを明久につないだ。

和樹「少しは加減しろ、工藤このままいくと明久が逝く」

明久「……はっ！お、僕は何をしてんだ？」

康太「……大丈夫か明久」

和樹「明久も少しは見ないように努力しろ」

明久 康太「（……）何を言っているんだ！偽でもパンチラは男のロマンだ」

明久とともに康太も親指をたててグーのマークをしている、全くと言っていいほど反省の色はない。

翔子「……話を戻すけど、何の話をしていたの？そして何で隠したの？」

大和「それは聞かないであげなよ、明久君には明久君なりの大変な事があるんだから」

愛子「確かにヤットの意見もあってるね」

大和「なるほど、いつの間にか僕のあだ名は決まったんだね」

愛子「ごめん、嫌だった」

大和「別に構わない、最初言っただでしょためらわず話してって」

愛子「分かったよヤット」

いつの間にか、とても仲良くなってる愛子、大和を放置し話は結構進んできている。

明久のプライバシー関係なしに話が進んでいった。

雅樹「よし決まったな！霧島妹頼んだぞ」

翔香「分かった…頑張る！」

明久「お願いね、霧島さん」

大和「それじゃあまず彼女に見えるようにしないとね」

笑いながら言う大和の顔は、少し歪んでいる笑いだった。

作戦！？（前書き）

お久しぶりです！！

色々と忙しくて更新が遅れてしまいました！（新規小説を書いていた）

それではどうぞ！！！！

作戦！？

明久「な、何でそんなに顔が歪んでいるの？」

大和「いやいや、そんな事はないよ僕はどこから見ても普通じゃないか？」

はたから見てもふつ々の笑い方をしていない大和を気にし

て見ている人はいないものの、明久は少し震えていた。

愛子「で、早く案を教えてよ」僕気になってきた」

翔香「私は…何をすれば…いいの？」

大和「具体的には、二人には帰り手をつないでかえってもらおう」

明久「それだけでいいの」

大和の説明がすくなくかったせいか呆気にとられてる明久に翔香は他の質問もしていた。

翔香「ルートとかも考えてあるの？」

大和「考えてあるよ、出来るだけ人目のつく場所を歩いて貰いたいんだ。僕としては、繁華街・大通りをできる歩いてくれるかな」

明久「それは構わないけど……それにどんな意味が？」

大和「明久君のお姉さんはよく買い物に行くかな？」

明久「まあ……ね行くけど……」

うなだれている明久を見て、ふっと笑うと大和は何かもう一つの作戦を考え始めたようで、手を顎に置いた。

大和「ならこの方法はやめたほうがいいな……ほかの方法……んなかなか難しいね」

和樹「ここまで来たら……もお行ってくれば？」

明久「どこまで来たの！？しかもどこに行くのさ！！？」

雅樹「凄いな…一氣に二つもつつこめるなんて……芸人になれば？」

明久「ならないよ！！それより皆真剣に考えてよ！！」

男達（大和以外）「いや考えんの疲れてね」

明久「考えてないでしょ！！しかもムツツリー二生き返ってるし！」

康太「一応さつきから生き返ってきてるが先ほどもう一回死んでた」

輸血パックを腕につけて壁に座りながら呟いていたが……見て目はカッコいいものの、実際はカッコ悪い。

大和「何か嫌な予感がするんだよ……」

愛子「何かいった？」

大和「大丈夫、気にしないで」

愛子「ならいいや、他の案を皆出してみて〜何でもいあよ」

大声で言うと、近くにある椅子に腰を掛けた。

和樹「そんな事言われても無いんだよね」

雅樹「ホイホイネタなんて思いつかないしな」

翔子「……話す内容が尽きなければ大丈夫だと思う」

大和「確かにね……でも一つ心配なことがあるんだ……問題点があるんだよ」

大和は少しためてからこおいった。

大和「明久君のお姉さんの無茶ぶりがどれほど過激かにもよるんだよ」



考えではなく……殺し合い（前書き）

皆さんお久しぶりです（T—T）

内容が思いつかなければ新規小説も書いていて……言い訳はもうしません

それでは久しぶりに、どうぞ!!

考えではなく……殺し合い

明久「僕の姉さんが過激！！そんなの100%当てはまるよ！」

大和「自信満々に言わなくていいよ明久君、そうか例えばどんな所が過激なの？」

明久の顔からは、冷や汗がダラダラと流れている。顔がだんだんと真っ青に染まりだす。

明久「お、思い出しただけでも吐き気がしてかたよ、昨日……」

~~~~~

回想

明久「ん、んーZZZZ」

？「……………」

明久の寝息だけが、暗闇の中で響く。その中で、スーツという音が

……

明久「な、何をしているのさ！！姉さん！！って何で僕のズボンが無くなってるの！？」

玲「明君の最初を奪うためです。ズボンが無いのは邪魔だったからです」

明久「冷静にそんな事言わないでよ！！僕が間違ってるみたいじゃないか！！」

騒がしく騒いでいる明久の頭に手を置き、2、3回撫でると、パンツを脱がそうと手をかけ始めた。

明久「そくだよね普通は……その普通がありえないんだよ！！姉さん！！落ち着いて考えれば納得するとも思っただの？」

玲「あれ？納得しないの？……でもコレは着て「明兄に何してんの？流石の玲姉ちゃんでも許さないよ？」…明菜子供はもう寝る時間よ？」

明菜「お、お兄ちゃんは私の物何だから！！」

明久「はいいいい！！！！」

極度のブラコンが全開となった明菜は、明久に両手を広げ抱きついてきた。

明菜「ね、お兄ちゃん！私が一番だよ、ね、ね」

明久「フギヤアアア！！」

~~~~~

明久「っていう悪、へブシ！！何で殴るんだよムツツリーニ！雅樹！」

康太「……どこが悪夢なんだ……最高だろ！」

雅樹「あんな可愛い、妹に抱きつかれて悲鳴だと！！息の根を止めてやる！行くぞ康太！」

康太「……そんな事は知っている許さない」

真っ赤なオーラを発している二人の後ろにいつの間にか、黒いオーラをまとった、愛子、翔香、翔子と声を殺して笑う大和がいる。

明久「いち、じ退散!!」

翔子「……話はしっかりと聞かせてもらおう!!」

翔香「説明しても……許さない……けど」

愛子「じっくり聞こうか」お兄ちゃん?

明久「僕はお兄ちゃんじゃない!!しかもいつの間にか何で三人の手には釘バットが握られてるの!!」

獣「（……）ウオオオ!!早く死ね明久!!」

このあと、2時間に及ぶリアル鬼ごっこが始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8529x/>

---

明久と水泳と幼なじみ

2011年12月30日23時47分発行